

七ヶ浜町文化財調査報告書第9集

清水洞窟貝塚

平成22年(2010年)3月

宮城県七ヶ浜町教育委員会

七ヶ浜町文化財調査報告書第9集

清水洞窟貝塚

宮城県七ヶ浜町教育委員会

序 文

七ヶ浜町は松島湾の南側を画する半島に位置し、温暖で自然に恵まれた、景観の素晴らしい町です。海岸部の大半は特別名勝松島の指定区域となっており、松島独特の景観が数多く残っております。

本町には、松島湾内三大貝塚のひとつである国史跡大木圓貝塚をはじめ、貝塚や集落跡など海からの豊かな恵みを享受しながら生活していた人びとの痕跡が町内各地に残っており、これらは本町の歴史を伝える貴重な文化遺産であります。

本書は、宮城県仙台東土木事務所による代ヶ崎浜地区急傾斜地崩落防止事業に関して、平成元年度に発掘調査を実施した清水洞窟貝塚の調査成果をまとめたものです。遺跡は松島四大觀多聞山麓の海蝕洞窟内に所在し、昭和17年の調査で26体分の人骨が出土したこと貝塚の存在が広く知られることとなりました。今回の調査では、洞窟内に堆積する貝塚と灰層などが確認され、縄文時代晚期から古代の遺物も出土し、縄文時代から古代に利用された洞窟遺跡であることが明らかになりました。

本書が広く活用され、地域の歴史研究と文化財保護に対する関心と理解を一層深め、役立つことを切に希望いたします。

最後に、発掘調査及び報告書作成にご協力とご援助を賜りました宮城県仙台東土木事務所(当時)、宮城県教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

七ヶ浜町教育委員会

教育長 中津川 伸二

例 言

1. 本書は、七ヶ浜町代ヶ崎浜地区急傾斜地崩落防止事業に伴う清水洞窟貝塚の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は七ヶ浜町教育委員会が主体となって、宮城県教育委員会が協力した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々及び機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った。(五十音順・敬称略)
佐藤則之、佐藤祐輔、菅原弘樹、須田良平、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県仙台東土木事務所（当時）
4. 本書の第1図(2頁)は七ヶ浜町都市計画図を複製・加工して使用した。
5. 本報告書中の土色の記述については、「新版標準土色帖」(小山・竹原 1973)を使用し、肉眼により観察を行ったものである。
6. 観察表内の法量で使用する()は残存部分の計測値、△は推定復元による計測値、ーは欠損などにより計測できなかったことを表す。また、長さについてはcm単位、重さについてはg単位である。
7. 本書刊行のための遺物整理、本書の執筆、編集は田村正樹が行った。
8. 発掘調査の記録や出土遺物は、七ヶ浜町教育委員会が管理し、七ヶ浜町歴史資料館で一括保管している。

調 査 要 項

遺跡名 清水洞窟貝塚(し す どうくつかいづか) (宮城県遺跡地名表登載番号: 20015)

所在地 宮城県宮城郡七ヶ浜町代ヶ崎浜字清水

調査原因 代ヶ崎浜地区急傾斜地崩落防止事業

調査期間 平成元(1989)年6月5日～20日

調査面積 約100m²

調査主体 七ヶ浜町教育委員会

調査協力 宮城県教育庁文化財保護課、宮城県仙台東土木事務所(当時)

調査担当 七ヶ浜町教育委員会生涯学習課文化財係 川村 正(当時)

調査協力 熊谷信一、芳賀英実

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の概要と環境	
1. 遺跡の概要	1
2. 地理的環境	1
3. 周辺の遺跡	3
第3章 調査の方法と調査成果	
1. 調査の方法と経過	5
2. 層序	7
3. 出土遺物	
(1) 土器	9
(2) 石製品	21
(3) 骨角製品	21
(4) 動物遺存体	22
第4章 考察	
1. 出土土器	24
2. 骨角製品	27
第5章 まとめ	28
引用・参考文献	29
写真図版	32

第1章 調査に至る経緯

昭和63(1988)年3月に宮城県仙台東土木事務所(当時)より本町代ヶ崎浜地区の急傾斜地崩落防止工事の計画が示された。計画は急傾斜地の崩落防止を目的として、代ヶ崎浜地区南東側の斜面全体にコンクリート壁を設置するもので、計画地内に周知の遺跡である清水洞窟貝塚が関わりを持つことが分かった。このため、昭和63年4月に埋蔵文化財に関わる協議書が七ヶ浜町教育委員会を経由し、宮城県教育委員会に提出された。宮城県教育委員会と七ヶ浜町教育委員会が現地確認を行ったところ、後世の破壊を受けていたが、工事対象地内に2か所の洞窟と洞窟内に堆積する遺物包含層を確認した。

この結果を受け、関係機関と協議した結果、工事により遺跡の状況把握等が今後困難になることから、県文化財保護課の協力のもと当町教育委員会が事前調査を実施することとなり、平成元(1989)年6月5日～20日まで発掘調査を実施した。また、遺跡の破壊を最小限にとどめるために遺跡を覆うコンクリート壁基礎の設置位置を変更するなどの措置がとられることなつた。

第2章 遺跡の概要と環境

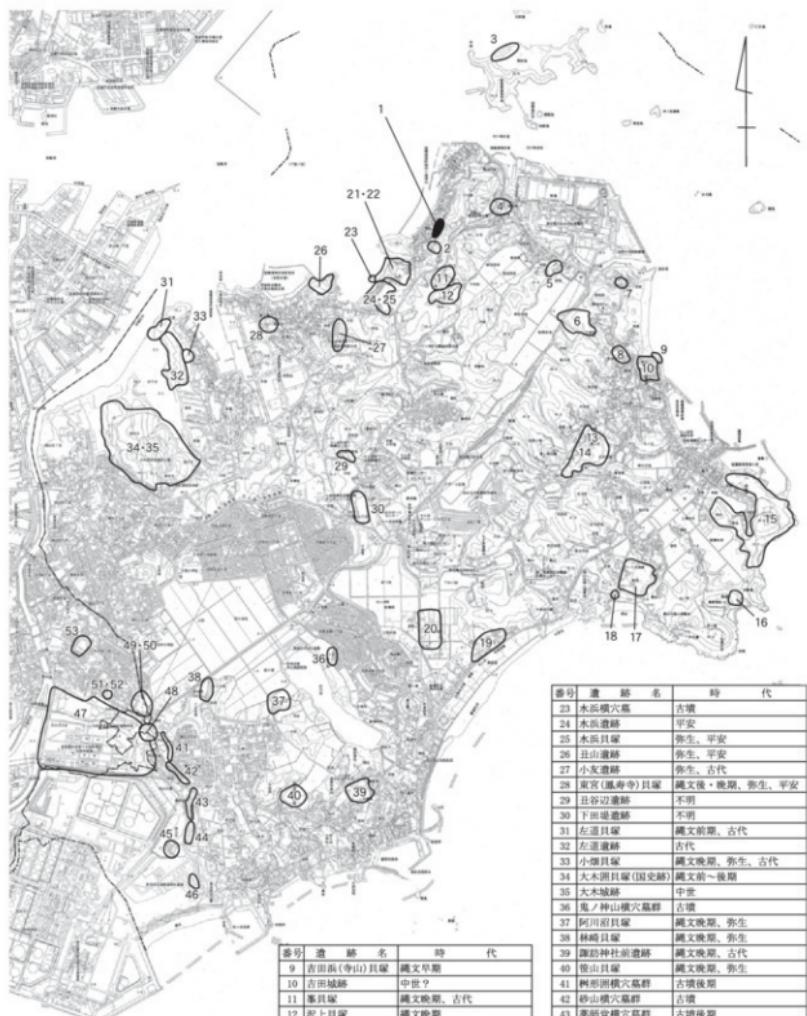
1. 遺跡の概要

清水洞窟貝塚は宮城県宮城郡七ヶ浜町代ヶ崎浜字清水に所在する。七ヶ浜町役場から北に約1.5kmの地点にあり、松島四大観多聞山の南西麓の海蝕洞窟内に立地する。遺跡の範囲内には北西に開口する2か所の洞窟があり、これらをまとめて清水洞窟貝塚と呼んでいる。遺跡の南西約50mには詳細は不明であるが、清水貝塚が所在する。現在、洞窟の前面には代ヶ崎浜の集落が広がっている。

本貝塚は、縄文時代晩期～古代の洞窟貝塚として周知されている。昭和17(1942)年の東北帝国大学医学部の川崎正文、大場利夫による発掘調査で幼児から成人の骨が26体分出土し、これを契機に遺跡の存在が広く知られるようになった。人骨は埋葬方位や埋葬姿勢が異なっているが、ほぼ同一の面から出土しているため、個々の埋葬時期の特定は難しい状況であった。唯一、埋葬時期が特定できるのは、弥生中期後半の壺形土器に納められた幼児骨のみである。調査ではこの他、カキを主体とする貝層と製塙炉と思われる石圓炉を検出した。出土遺物は「日置」の墨書がある土師器の壺をはじめ、縄文土器、弥生土器、製塙土器、石器、骨角器、貝製品(貝匙)等が出土している。

2. 地理的環境

七ヶ浜町は、宮城県の太平洋沿岸の中南部に位置し、松島湾の南側を画するように突き出



第1図 清水洞窟貝塚と周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代
1	清水洞窟貝塚	縄文後期、弥生、平安
2	清水貝塚	古代
3	馬場鳥貝塚	平安
4	影田貝塚	平安
5	神月遺跡	古代
6	二削田(空堀)貝塚	縄文後、後期、弥生
7	武沢貝塚	縄文後期、弥生、平安
8	吉田神社遺跡	古代

番号	遺跡名	時代
9	吉田面(寺山)貝塚	縄文早期
10	吉田城跡	中世?
11	秦貝塚	縄文後期、古代
12	沢上貝塚	縄文後期
13	柳ヶ沢貝塚	縄文前、中期
14	若ヶ岡貝塚	縄文前、中期
15	花瀬城跡	平安・中世
16	轟雷神社遺跡	古代
17	渡浜貝塚	平安
18	高山横穴墓群	古墳後期
19	長原貝塚跡	縄文、平安
20	東原遺跡	古墳
21	土蔵A貝塚	弥生、古代
22	土蔵B貝塚	平安

番号	遺跡名	時代
23	水田横穴墓	古墳
24	水田遺跡	平安
25	水長貝塚	弥生、平安
26	丘山遺跡	弥生、平安
27	小友遺跡	弥生、古代
28	東宮(風寿寺)貝塚	縄文後・晚期、弥生、平安
29	丑谷遺跡	不明
30	下川堤遺跡	不明
31	左道貝塚	縄文前期、古代
32	左道遺跡	古代
33	小畠貝塚	縄文後期、弥生、古代
34	大木洞貝塚(国史跡)	縄文前・後期
35	大木洞	中世
36	鬼ノ神横穴墓群	古墳
37	阿川宿原塚	縄文晚期、弥生
38	林崎貝塚	縄文晚期、弥生
39	諏訪神社前遺跡	縄文晚期、古代
40	菅山貝塚	縄文晚期、弥生
41	柳形洞穴墓群	古墳後期
42	砂山横穴墓群	古墳
43	裏跡交横穴墓群	古墳後期
44	弁天A遺跡	古代
45	弁天B遺跡	古代
46	弁天C遺跡	古代
47	新田前山塚	古代
48	柳形田貝塚	縄文晚期、弥生、古代
49	大代(橋本洞)貝塚	縄文後期、古代
50	橋本洞横穴墓群	古墳後期
51	大代窓	中世
52	大代横穴墓群	古墳後期
53	柏木遺跡(別史跡)	古代



た半島(七ヶ浜半島)に所在する。町域の北側には松島湾が広がり、南と東は太平洋に面している。西側は多賀城市や塙竈市に接する。東北地方で最小面積(13.27 km²)の町である。

本町の地形は、沖積低地、丘陵地、島嶼の3つに分類できる。町域の南部に広がる沖積低地は、海岸部には砂浜が分布し、内陸部には浜堤及び後背湿地が発達している。現在はほとんどが水田や宅地として利用されている。七ヶ浜半島の低地は海水面変動の影響を直接受ける地域であり、周辺に暮らす人々の生活に大きな影響を与えてきた。沖積低地では、縄文時代の海水面変動に伴い陸地への海水の流入と後退が起き、広大な湾や潟湖が形成された。こうした湾を望む丘陵には縄文時代晚期～弥生時代中期の製塩遺構や貝塚が点在しており、積極的に低地や臨海部の利用が行われていたことを物語っている。

町域の中央部に広がる丘陵地は、塙竈市及び多賀城市から連なる標高100 m前後の比較的なだらかな稜線からなり、丘陵端部では比高20 m程の急崖が確認される。標高20～40 mの丘陵上や緩斜面部には縄文時代前・中期の集落跡・貝塚が点在し、大規模集落も見られる。

松島湾に浮かぶ大小の島嶼は、基本的には丘陵地と同様の性質であり、海岸部には低地がわずかに認められる。これらの島嶼や松島湾に面した海岸線、丘陵地は、特別名勝松島の指定区域となっており、松島独特の景観を構成する要地となっている。

本貝塚は、町域の東西に広がる丘陵地の北東端、多聞山の裾部にあたる急斜面の標高4～5 mの海蝕洞窟内に所在する。洞窟の上部はほぼ垂直に切り立った崖面で、直径10～50 cm程の礫が多数露出している。かつて、遺跡周辺は多聞山の裾と塙釜湾の汀線の間に形成された小規模な浜であったが、埋め立てによって宅地化が進み、周辺の景観は急激に変化している。

3. 周辺の遺跡

七ヶ浜町における周知の遺跡は49か所(第1図)を数え、これらは丘陵地や海岸部の低地、洞窟などに所在する。以下、七ヶ浜半島の遺跡を中心に、縄文時代～古代までを概観する。

縄文時代

七ヶ浜半島を含む松島湾は、県内有数の貝塚密集地域である。本町でも多数の貝塚が確認されており、代表的な遺跡としては早期の吉田浜貝塚、前期の左道貝塚、前期前半～後期前半の大木間貝塚、後期中葉～晚期の二月田貝塚などが挙げられる。縄文前期～晚期には、大木間貝塚や二月田貝塚などの大規模集落が見られる。これらの遺跡の立地については、縄文中期までは標高30～40 mの丘陵地や丘陵緩斜面に立地し、縄文後期～晚期には標高5～20 mの丘陵端部や海岸部の低地に遺跡が立地するという時期的な変遷が見られる。こうした立地の違いは、海水面変動による周辺環境の変化などの要因が考えられる。縄文後・晚期に始まった塩作りは、町内各地で断続的に平安時代まで続けられる。二月田貝塚や鬼ノ神山遺跡

では縄文時代晚期の製塙炉が複数検出され、大量の製塙土器も出土している。

大木圓貝塚は、明治時代から遺物が大量に出土する遺跡として知られ、大正6(1917)年の東北帝国大学理学部の松本彦七郎による調査を皮切りに、数多くの研究者によって調査が行われた。特に、昭和2～4(1927～29)年に7地点の層位的な調査を行った山内清男は、出土した縄文土器をもとに「大木式土器」の分類整理を行い、東北地方中・南部(陸前地方)の縄文時代前・中期の土器編年を確立したことは大変有名である。昭和38(1964)年3月18日には、「大木式土器」の標式遺跡として国史跡に指定され、現在史跡公園として開放されている。吉田浜貝塚は、松島湾内で現存最古の貝塚として知られている。昭和38・40(1963・65)年の調査では、アサリ主体の貝層とカキ主体の貝層を確認し、縄文早期中葉～後葉の貝殻文・縄文条痕文土器や石器が出土している。二月田貝塚は、町内では大木圓貝塚に次ぐ規模の集落跡で、縄文時代後・晚期の拠点的集落である。昭和44・45(1969・70)年に発掘調査が行われ、縄文後期中葉～晚期後葉の土器及び製塙土器のほか、骨角器、人骨、口元に三角形の文様がある土偶などが出土している。このように、町内では古くから縄文時代の遺跡の発掘調査が行われ、豊富な海産資源をもとに豊かな生活を営んでいた縄文の人びとの暮らしづくりが明らかになっている。

弥生時代

弥生時代になると、松島湾内では遺跡数が減少する傾向が見られ、貝塚の規模も縮小する。本貝塚のように海蝕洞窟を利用する場合も見られる。遺跡は、縄文晚期から継続する二月田貝塚のほか、東宮(鳳寿寺)貝塚、水浜貝塚、林崎貝塚、阿川沼貝塚など弥生中期を中心とする遺跡が分布している。東宮(鳳寿寺)貝塚は、標高6mの丘陵の東斜面に所在する弥生時代の貝塚である。昭和40(1965)年の発掘調査では、丘陵斜面下の調査区からは厚さ2mの貝層が確認され、弥生中期前半の土器、製塙土器、閉窓式離頭鉛などが出土した。製塙については弥生時代も行われていたが不明点が多い。

古墳時代

七ヶ浜町を含む七北田川北部では、前期古墳は確認されていないが、後期になると多賀城市稻荷殿古墳や利府町川袋古墳など横穴式石室を持つ円墳や中小の円墳からなる古墳群が築造される。古墳周辺の多賀城市山王遺跡や新田遺跡、市川橋遺跡からは古墳前期～後期の遺物が出土しており、方形周溝墓も確認されている。終末期には、多賀城市大代から当町湊浜に断続的に続く斜面部に横穴墓が多数造営される。湊浜地区では、樹形圓横穴墓群、砂山横穴墓群、菜師堂横穴墓群が確認されており、多賀城市大代横穴墓群から続く大規模な横穴墓群である。横穴墓は埋没しているものもあり、今後新たに発見される可能性も多い。砂山横穴古墳群は昭和49(1974)年に調査が行われ、崖面中腹の標高10m前後の斜面に横穴古墳が

13 基確認された。玄室、羨道、前庭部という3部構成からなる横穴は破壊を受けているもののが多かった。出土遺物は7世紀後半～8世紀初頭の土師器の壺や高壺、須恵器の壺や長頸瓶・平瓶、直刀、ガラス玉などが出土している。この他、花渕浜高山地区や東宮浜水浜地区でも小規模な横穴墓が確認されているが、いずれも海蝕、風化、後世の改変(倉庫や防空壕)により原形をとどめているものは少ない。

古代

陸奥国の国府多賀城の創建により律令制が浸透し、県内の各地に郡が設置された。本町では、長須賀遺跡や水浜遺跡、左道遺跡、表浜遺跡など、奈良・平安時代の集落が丘陵緩斜面や海岸部に多数営まれる。これらの遺跡では製塩遺構や製鉄遺構などの工房的機能を持つ集落も見られる。多賀城に近いという七ヶ浜町の地理的特徴から考えると、これらの工房は多賀城との関わりが強く、国府直営工房も存在したものと考えられる。

花渕浜字誰道に所在する鼻節神社は、猿田彦命を祭神として祀る神社である。創建時期は不明であるが、『続日本後記』に承和11(844)年に從五位下に昇叙された記録や『延喜式内神名帳』に名神大社として記載されている格式高い神社として有名である。明治時代に社殿改修が行われた際、「国府厨印」の印文が刻まれた銅印が発見され、多賀城の食料調達部署である「厨」の印であると考えられる。

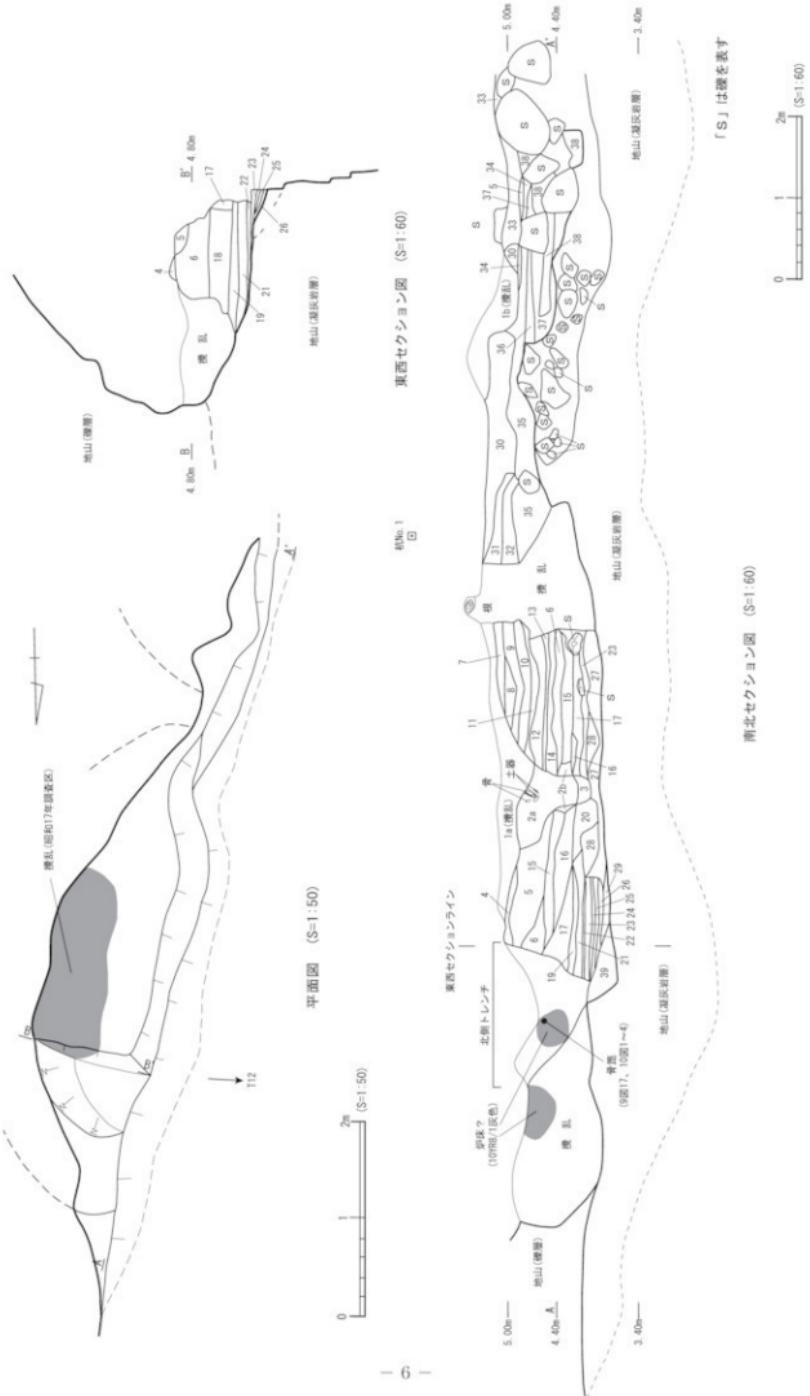
第3章 調査の方法と調査成果

1. 調査の方法と経過

計画は垂直に切り立った斜面部を成形し、コンクリート壁による斜面保護を行うため、これらに覆われる洞窟2か所が調査対象となる。この洞窟は、北側の洞窟を「A地点」、南側の洞窟を「B地点」として調査を行い、本報告でも同様の呼称を使用した。

両洞窟内には貝層、灰層が厚く堆積しており、その断面が南北方向に露出していた。調査は遺物包含層の堆積状況の確認と断面図作成を主な目的とし、断面の一部掘削と遺物採取を行った。A地点では、東西方向の堆積状況を確認するために北側トレンチを設定し、洞窟の床面まで掘削した。また、遺物包含層東壁の一部掘削(東側トレンチ)も行った。B地点は洞窟の天井部がほぼ崩落し、奥壁のみが残存している状況であったため、東西方向にトレンチの設定は行わず、遺物包含層東壁の一部掘削と遺物採取のみ行った。

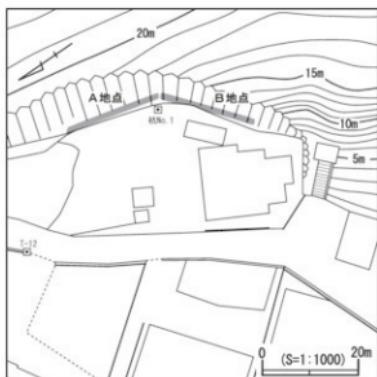
作成図面は、A地点が1/20縮尺の南北方向(A-A')と東西方向(B-B')の断面図、1/20縮尺の平面図を作成し、B地点は1/20縮尺の南北方向(A-A')の断面図を作成した。写真是6×7判カラーと35mm判モノクロ及びカラーを用いて撮影した。



第3図 清水洞窟貝塚A地点平面図・南北セクション図・東西セクション図

層位	土色	特徴
1a	10YR5/2 灰黃褐色	擾乱層、木の根、貝小片を多く含む、小礫を含む
1b	10YR4/4 棕褐色	擾乱層、大型礫・貝殻・炭化物を含む
2	10YR1.7/1 黒色	炭化物層、土器片(奈良・平安時代の环)・骨が出土、2b層は2a層の崩落土
3	10YR4/4 棕褐色	炭化物・燒土層、小石・凝灰岩粒を含む
4	10YR8/2 灰白色	帶状に厚さ1~2cmの灰層(10YR8/6 黄橙色)を含む、炭化物・貝殻小片を含む
5	10YR7/3 にぶい黄橙色	アサリ70%・カキ25%・その他貝5%含む この貝層は流れがわからず混在している
6	10YR8/1 灰白色	土器小片・貝殻・炭化物粒を含む
7	10YR7/2 にぶい黄橙色	土器を含む
8	10YR7/1 灰白色	貝殻・炭化物・土器を含む
9	7.5YR8/3 浅い黄橙色	純灰層
10	7.5YR7/2 明褐灰色	貝殼(主にアサリ)・炭化物を含む
11	2.5YR7/2 灰黄色	貝殼(主にカキ)・炭化物を含む
12	10YR8/3 浅い黄橙色	貝殼(主にカキ)・下層に巻貝を多く含む、炭化物を含む
13	10YR6/4 にぶい黄橙色	土器小片・炭化物を含む
14	10YR5/4 にぶい黄橙色	貝殼(アサリ50%、カキ40%、巻貝10%)・土器小片・炭化物を含む
15	2.5YR8/2 灰白色	貝殼(主にアサリ)・炭化物を含む、上層にアサリを含む
16	10YR5/4 にぶい黄褐色	炭化物を少量含む
17	10YR8/2 灰白色	土器小片・貝殼を含む、炭化物を少量含む
18	10YR7/1 灰白色	土器小片・炭化物・小石を含む 層の下部には製塙炉の床と思われる
19	10YR4/4 棕褐色	土器小片・貝殼を含む
20	10YR4/4 棕褐色	土器小片・炭化物を含む、下部に凝灰岩を多く含む
21	7.5YR8/3 浅い黄橙色	貝殼・炭化物を含む
22	7.5YR7/3 にぶい橙色	灰層
23	7.5YR7/2 明褐灰色	炭化物と灰を含む
24	7.5YR7/4 にぶい橙色	炭化物・貝殼を含む、下部に土器片を多く含む
25	7.5YR7/2 明褐灰色	灰層
26	7.5YR8/3 浅い黄橙色	炭化物を少量含む
27	7.5YR6/6 橙色	土器小片・炭化物を含む、下部に凝灰岩を多量に含む 層中に層厚2~10cm、幅約1mの灰層(7.5YR8/1 灰白色)を挟む
28	10YR6/6 明褐褐色	凝灰岩を多量に含む、地山崩落土か?
29	7.5YR7/6 橙色	燒土層
30	10YR7/2 にぶい黄橙色	面積割合60%が貝層(アサリ、カキ、巻貝)で、40%が灰層(10YR8/2 灰白色)である 土器小片と炭化物を含む
31	10YR7/3 にぶい黄橙色	土器小片と炭化物を含む
32	10YR7/4 にぶい黄橙色	カキ・二枚貝・巻貝を含む。土器小片・炭化物を含む
33	10YR6/3 にぶい黄橙色	凝灰岩と砂を含むシルト層
34	10YR5/3 にぶい黄橙色	燒土・炭化物を含む
35	10YR8/4 浅い黄橙色	小石・炭化物を含む
36	10YR6/4 にぶい黄橙色	小石・炭化物を含む
37	10YR6/6 明褐褐色	小石を多く含む
38	10YR5/6 黄褐色	製塙土器・製塙土器を面積割合60%以上含む
39	7.5YR8/2 灰白色	地山、凝灰岩崩壊層

第1表 清水洞窟貝塚A地点土層附記表



第2図 清水洞窟貝塚A・B地点位置図

2. 層序

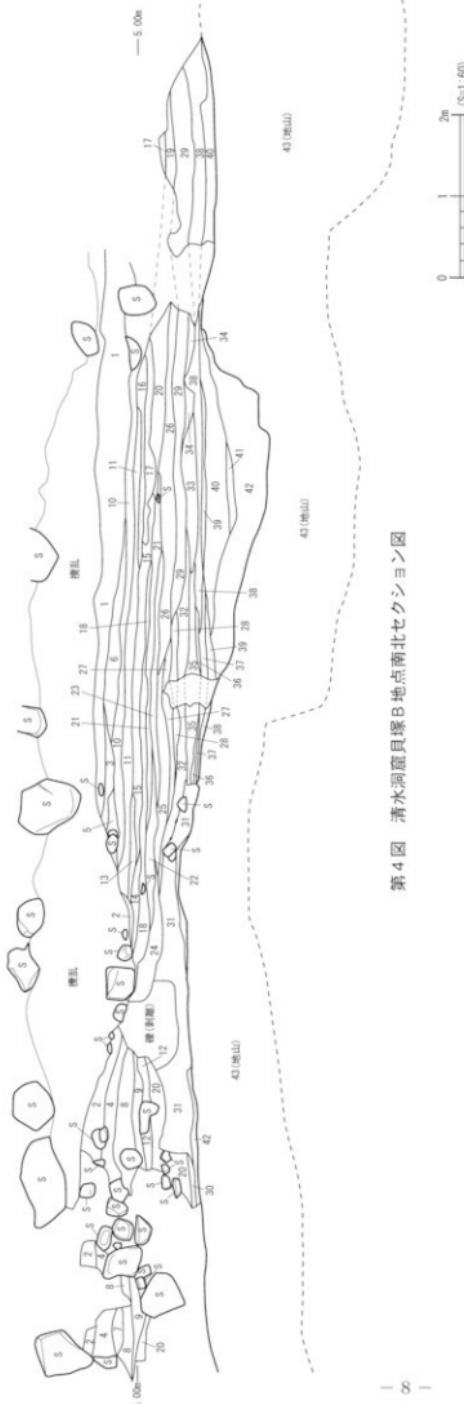
両洞窟は崩落や破壊がかなり進んでおり、奥壁と床面の一部が残存するのみであった。大場利夫の概報では、昭和17(1942)年の調査時点での洞窟の床面を形成している標高4m、広さ30m程の台地が存在したこと、昭和7(1932)年に台地の北側が湿地埋め立てのために掘削され、昭和14年頃に家屋を建てるために台地の南側が削られたことが記されていることから、かつては洞窟の床面や天井部などがかなり残存していたことが分かる。洞窟は凝灰岩層を床面としており、包

第2表 清水洞窟貝塚B地点土層注記表

番号	上・下層	層相	地質	上・下層	層相	地質	上・下層	層相	地質	
22	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	23	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	24	底層	砂質粘土層
23	底層	灰褐色	中	24	底層	灰褐色	中	25	底層	砂質粘土層
25	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	26	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	27	底層	砂質粘土層
27	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	28	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	29	底層	砂質粘土層
30	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	31	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	32	底層	砂質粘土層
33	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	34	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	35	底層	砂質粘土層
35	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	36	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	37	底層	砂質粘土層
37	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	38	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	39	底層	砂質粘土層
40	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	41	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	42	底層	砂質粘土層
43	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	44	底層	砂質粘土層	上部砂質粘土層	45	底層	砂質粘土層

1	上層	砂質粘土層	中	2	上層	砂質粘土層	中	3	上層	砂質粘土層	中
4	上層	砂質粘土層	中	5	上層	砂質粘土層	中	6	上層	砂質粘土層	中
7	上層	砂質粘土層	中	8	上層	砂質粘土層	中	9	上層	砂質粘土層	中
10	上層	砂質粘土層	中	11	上層	砂質粘土層	中	12	上層	砂質粘土層	中
13	上層	砂質粘土層	中	14	上層	砂質粘土層	中	15	上層	砂質粘土層	中
16	上層	砂質粘土層	中	17	上層	砂質粘土層	中	18	上層	砂質粘土層	中
19	上層	砂質粘土層	中	20	上層	砂質粘土層	中	21	上層	砂質粘土層	中
22	上層	砂質粘土層	中	23	上層	砂質粘土層	中	24	上層	砂質粘土層	中
25	上層	砂質粘土層	中	26	上層	砂質粘土層	中	27	上層	砂質粘土層	中
28	上層	砂質粘土層	中	29	上層	砂質粘土層	中	30	上層	砂質粘土層	中
31	上層	砂質粘土層	中	32	上層	砂質粘土層	中	33	上層	砂質粘土層	中
34	上層	砂質粘土層	中	35	上層	砂質粘土層	中	36	上層	砂質粘土層	中
37	上層	砂質粘土層	中	38	上層	砂質粘土層	中	39	上層	砂質粘土層	中
40	上層	砂質粘土層	中	41	上層	砂質粘土層	中	42	上層	砂質粘土層	中
43	上層	砂質粘土層	中	44	上層	砂質粘土層	中	45	上層	砂質粘土層	中

第4図 清水洞窟貝塚B地点南北セクション図



含層はこの床面上に堆積している。また、A地点奥壁側で床面まで達する黒色土の攪乱層を確認した。北側トレンチの断面観察や大場利夫の概報から、攪乱層は昭和17(1942)年の調査区であると考えられる。

両地点の遺物包含層は、土器や貝殻、灰、炭化物などの遺物が含まれている割合や土質(硬さ・粘度・色調など)から全体としてA地点が39枚、B地点が43枚の層に分層した。A地点は、洞窟の南北約15m、東西約2.5mの範囲に、カキとアサリを主体とする貝層、製塩に伴う灰層、焼土層などが、最大1.4mの厚さで水平に堆積し(第3図)、炭化物や動物遺存体なども含んでいる。貝層は、全体としてカキとアサリで出土量の大半を占め、巻貝などが少量混じる状況である。黒色土層である2a層はV字状の堆積を示すことから、昭和17年の調査にかかる攪乱の可能性がある。

B地点は南北約17m、最大2.1mの厚さで堆積している(第4図)。A地区に比べ天井部分の崩落が著しいため、東西方向の堆積状況は不明である。貝層はカキを主体とする貝層とアサリを主体とする貝層があり、全体としてはカキとアサリ主体で、巻貝やハマグリを少量含む状況はA地区と同様の傾向を示している。

3. 出土遺物

(1) 土 器

A地点東側トレンチ及び北側トレンチ、B地点から出土した略完形土器と個体認定可能な口縁部、有文破片、底部等を抽出し、土器の検討を行った。その結果、土器は繩文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器があり、各時期の土器が混在した状況で出土している。総出土点数は1007点で、図示した土器はA地点東側トレンチ56点、北側トレンチ42点、B地点53点の計151点である。

【A地点 東側トレンチ】

1a層出土土器 (第5図1~5)

弥生土器と製塩土器が出土した。1は弥生中期後半の甕である。口縁部が外反する器形で、口縁部と体部に平行沈線が巡り、頸部に2条1組の沈線による山形文が描かれる。山形文は2条の縦位沈線で区画される。2はLR繩文を施した体部破片である。3は土師器の口縁部である。口縁部がゆるやかに外反する器形で、外面をナデ、胴部をハケメによる調整を行っている。4・5は製塩土器である。4は内外面ともにナデ調整を施した薄手の製塩土器で、器形は深鉢形になると思われる。5は底部に網代痕が認められ、調整は内外面ともにヘラナデである。

2a層出土土器 (第5図6~8)

弥生土器と土師器が出土した。6はRL繩文と平行沈線が施される。7はLR繩文が回転

施文されている。8は土師器の坏である。外面が口クロナデ調整、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施す。底部は回転糸切りによる切り離しを行っている。

5・6層出土土器（第5図9～19）

縄文土器、弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。9は縄文晚期の鉢で、口縁部の内外面と口唇部に沈線が巡り、波状口縁を呈する。沈線内は赤色顔料が残存している。10は赤彩された土師器の坏である。11は外面が縦位のハケメ、内面が横位のハケメ調整が施される。12は弥生時代の壺で、2条1組の沈線が横位に施文される。13は縄文土器の体部で、LR縄文を施文する。14はRL縄文が施文される破片である。15は植物の茎を回転させて縄文風の文様を施文した破片で、B地点26層出土の破片と接合した。16は甕の体部で、節の細かい撫糸文が施される。17～19は製塙土器であり、外面にはヘラナデやミガキ、内面にはナデ調整が施されている。19は底部に木葉痕がある。

14層出土土器（第5図20～22、第6図1）

弥生土器、製塙土器が出土した。20はLR縄文が施文される体部破片である。21～23は製塙土器の口縁部及び体部で、色調は赤茶色や灰色を呈するが、内外面の色調が異なるものがある。全体的に器壁が薄く、調整が荒い。

17・19・22層出土遺物（第6図2～9）

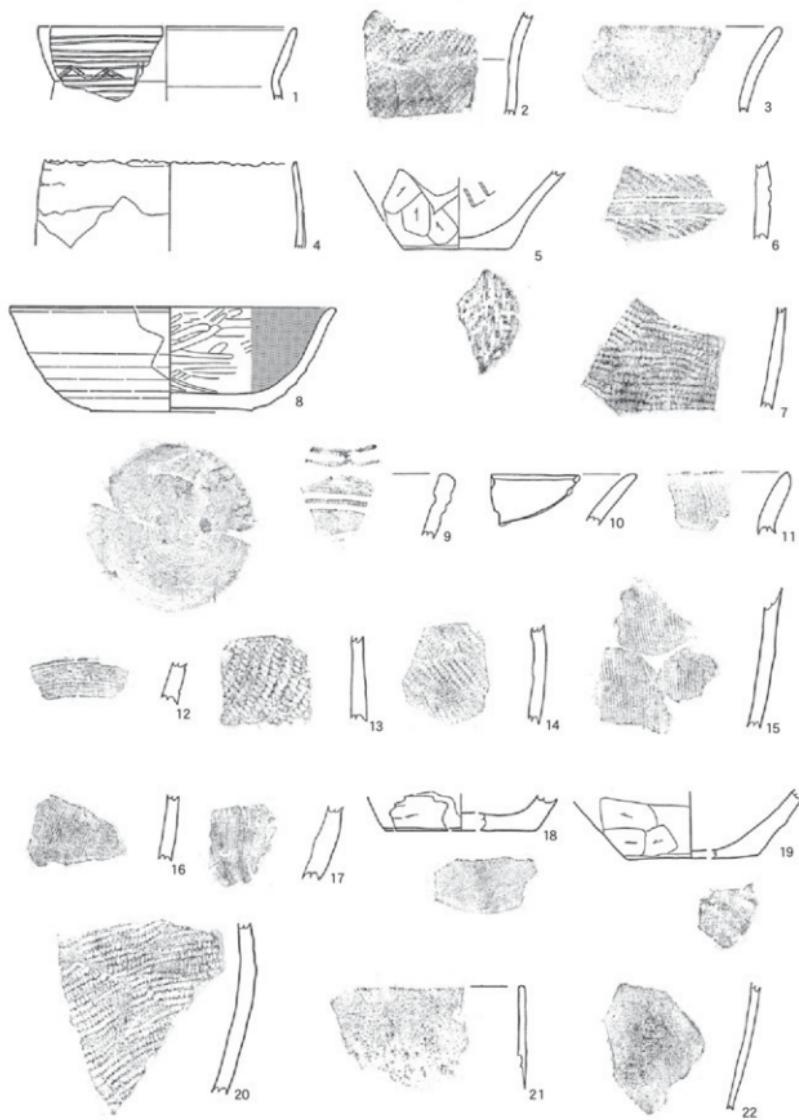
縄文土器、土師器、製塙土器が出土した。2～4は製塙土器である。調整は外面がケズリとヘラナデで、内面はヘラナデとナデ調整がある。底部形態は尖底と尖底風丸底がある。外面に灰白色の付着物がみられるものがある。5・6・8・9は縄文土器の破片で、RL縄文やLR縄文、羽状縄文が施文される。6は胎土に赤茶色の細粒を若干含む。8は口唇部に刻目を持つ。7は土師器の坏である。外反して立ち上がる器形で、体部下半に段を持つ。調整は外面がナデ、内面がミガキ調整後に黒色処理を行っている。

28層出土遺物（第6図10～18）

縄文土器、弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。10は口縁部破片で、LR縄文が施文される。11は弥生後期の折り返し口縁の土器で、内面にも縄文地文が見られる。12はRL縄文を施文し、口唇部にも縄文が認められる。13・14はLR縄文を施文する体部破片である。15はハケメ調整を施した土師器と考えられる。16～18は製塙土器で、色調は褐色、橙色、赤褐色を呈する。調整は内外面にヘラナデやナデである。底部形態は尖底と底径の小さな平底がある。

表採遺物（第6図19～24、第7図1～10）

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。19・21～24は弥生土器の破片である。20・1はLR縄文を施文する破片である。2は土師器の壺で、内外面に赤色顔料が塗付されている。調整は外面がミガキ、内面がナデである。3は須恵器の甕または蓋で、外面は沈線文とハケメ痕がある。4は土師器の甕の体部～底部で、調整は内外面、底部ともにヘラナデ

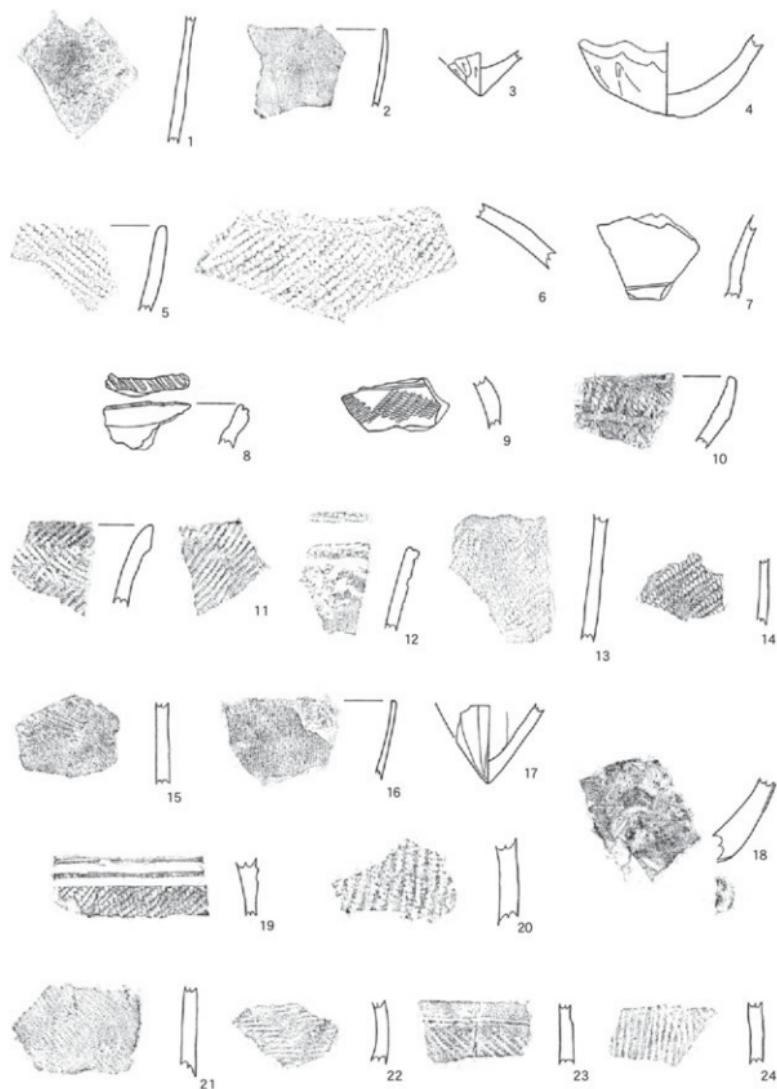


※2・4は縮尺1/3

0 5cm (S=1:3) 0 5cm (S=1:2)

1~5: 1a層(擾乱)、6~8: 2a層、9~11・13~19: 5層、12: 6層、20~22: 14層

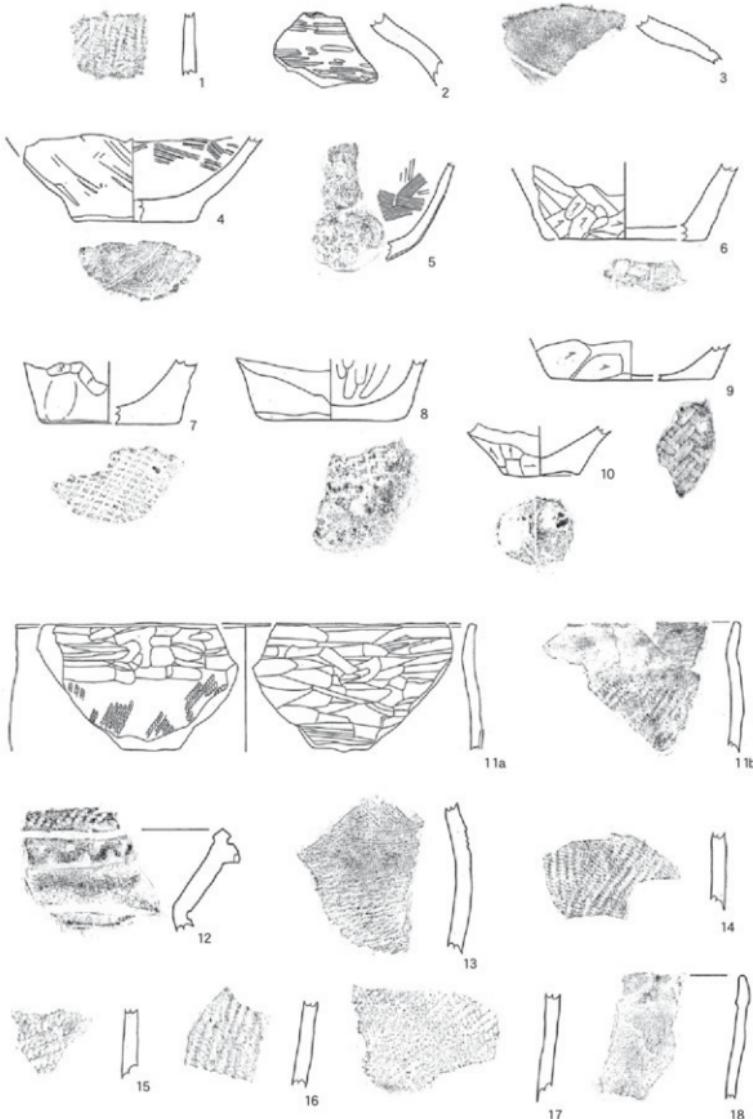
第5図 A地点東側トレンチ出土土器(1)



1: 14層、2~4: 17層、5~7: 19層、8・9: 22層、10~18: 28層、19~24: 表採

0
5cm
(S=1.2)

第6図 A地点東側トレンチ出土土器(2)

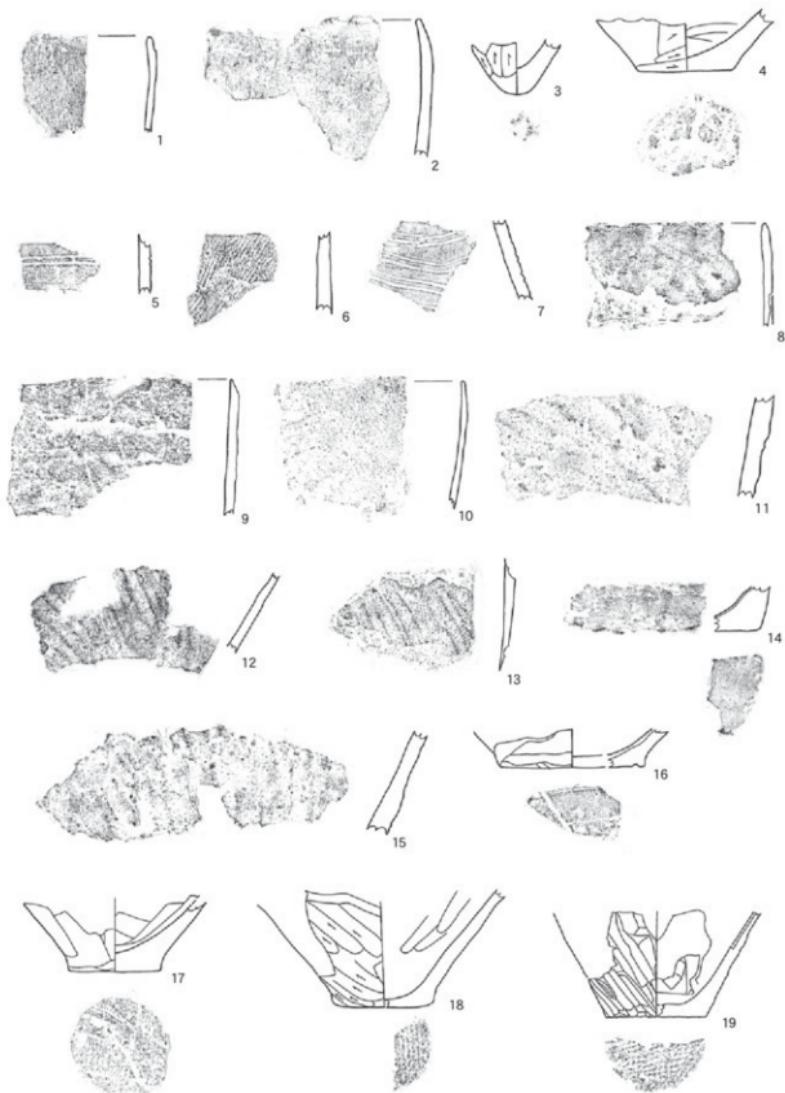


※3・4・5・11は縮尺1/3

0 5cm (S=1:3) 0 5cm (S=1:2)

1~10: 表探(東側トレンチ)、11~18: 6層(北側トレンチ)

第7図 A地点東側トレンチ出土土器(3)・北側トレンチ出土土器(1)

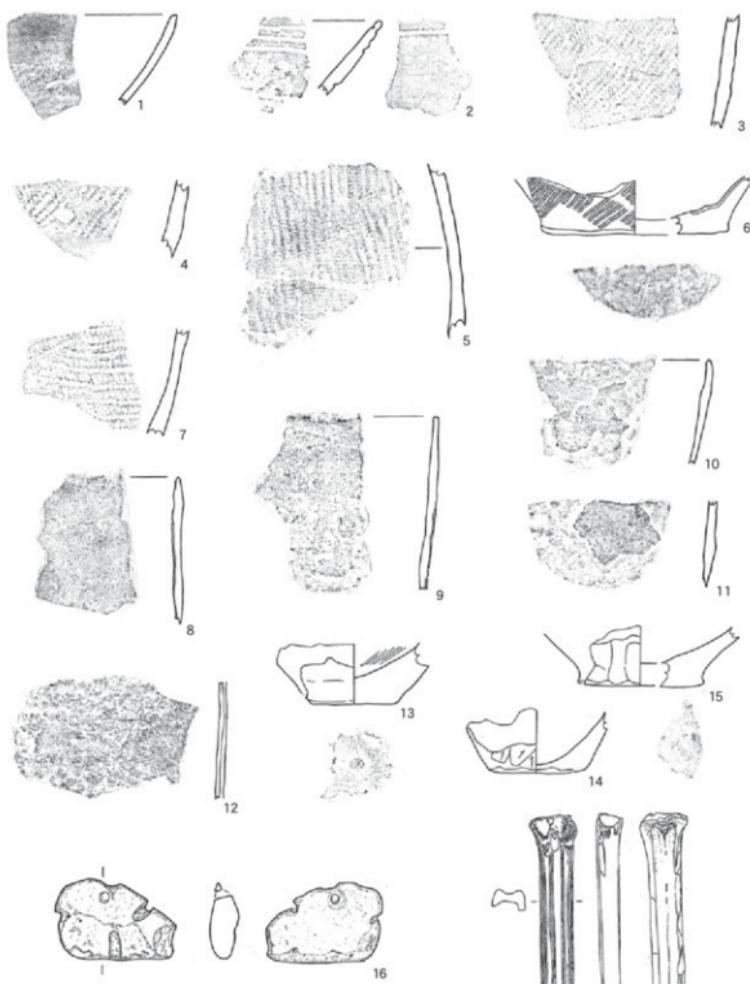


※8・9・11・12・18・19は縮尺1/3

0 5cm (S=1:3) 0 5cm (S=1:2)

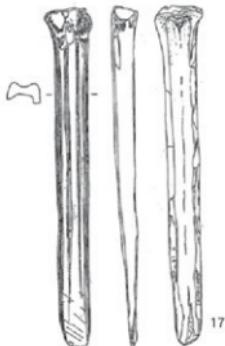
1~4:6層、5~19:18層

第8図 A地点北側トレンチ出土土器(2)

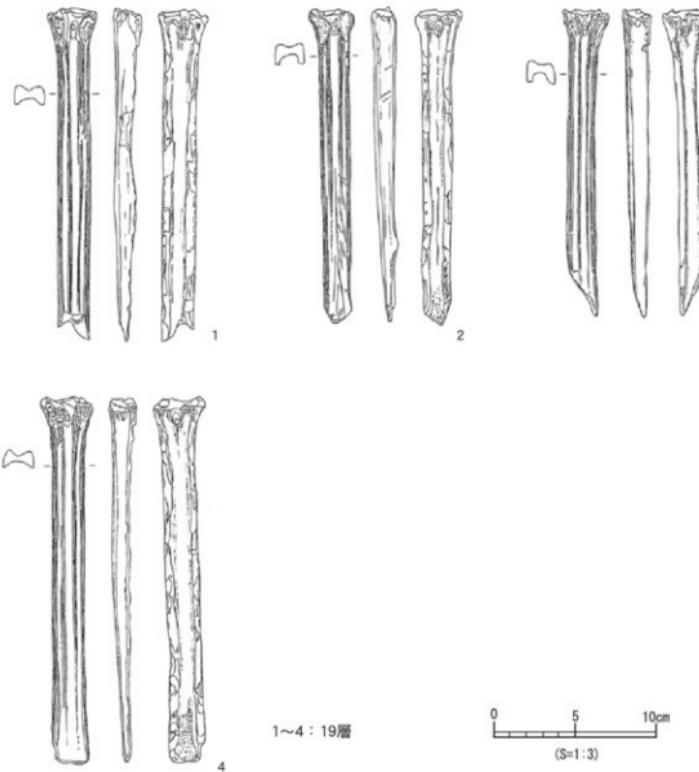


1~15 : 19層、16 : 18層、17 : 19層

※12・17は縮尺1/3



第9図 A地点北側トレンチ出土土器(3)・石製品・骨角製品(1)



第10図 A地点北側トレンチ出土骨角製品(2)

である。5～10は製塙土器である。底部形態は丸底と平底があり、平底のものには網代痕や布目圧痕がみられる。調整は外面がヘラナデ、内面はヘラナデやミガキがみられる。

【A地点 北側トレンチ】

6層出土土器（第7図11～18、第8図1～4）

弥生土器、製塙土器が出土した。11a・11bは弥生中期後半の甕で、同一個体と思われる。口縁部～頸部にヘラナデ調整を施し、体部はLR綱文が施文される。12は弥生後期の壺で、口縁部の沈線の直下に交互刺突文を巡らせ、頸部には2条の沈線が巡る。13は弥生中期後半の壺で、2本1組の沈線による山形文が施文されている。14～16はLR綱文を施文する破片である。17・18・1～4は製塙土器で、色調は褐色や赤褐色を呈する。底部形態は尖底風丸底と平底があり、平底ものは木葉痕がある。17は綱文原体の施文あるが、加熱による赤変や剥離が著しく、灰白色の付着物も見られることから製塙土器として利用されたと思われる。

18 層出土土器（第 8 図 5～19）

弥生土器、製塙土器が出土した。5・7は弥生中期後半の破片で、2条1組の沈線文が巡る。7は5よりやや幅広の工具を使用している。6は弥生土器の甕である。8～19は製塙土器で、色調は灰白色～赤褐色を呈する。内外面に剥離がみられるものが多く、器壁が層状に剥離しているものもある。調整は外面がヘラナデやナデ、内面がヘラナデやナデ、ミガキであり、中には外面のケズリ風のヘラナデ調整が残るものもある(11・12など)。底部形態は平底で、木葉痕や布目痕がみられる。

19 層出土土器（第 9 図 1～15）

縄文土器、弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。1は土師器の坏で、調整は外面が口クロナデ、内面はナデ調整の後に黒色処理している。2は縄文晚期後半の鉢で、外面は3条、内面に1条の沈線が巡る。沈線内に赤色顔料が残る。3～5・7は縄文原体を施文する体部破片である。6・8～15は製塙土器である。11は内から外へ向けて穿孔がある。

【B 地点】

2・3・10 層出土遺物（第 11 図 1～9）

弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。1は底部からやや内傾して立ち上がる器形の製塙土器である。調整は内外面ともにヨコナデである。2は深鉢形の製塙土器で、調整は外面がナデ、内面がハケメである。3は内外面と底面にヘラナデ調整を施す土師器の甕である。4は内外面にヨコナデ調整を施す土師器の壺である。5は弥生中期後半の結節縄文を施した破片である。7は頸部に沈線が巡り、その下部にLR縄文を施文する甕である。8は底部に木葉痕を持つ製塙土器で、調整はヘラナデである。9は弥生前期の鉢で、沈線による変形工字文を描き、内面は口縁部に沈線が巡る。調整は内外面とともにミガキ調整である。

16・18・25 層出土遺物（第 11 図 10～17）

弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。10は土師器の破片である。11・12・17は植物の茎を回転させて縄文風の文様を施文した破片である。細い条痕に沿って棘状の圧痕が認められるものがある。13・14は底部に木葉痕を持つ製塙土器である。14は内面が丁寧なミガキ調整が施されている。15・16はRL縄文を施文する体部破片で、同一個体の可能性がある。

26・27・29 層出土遺物（第 12 図 1～13）

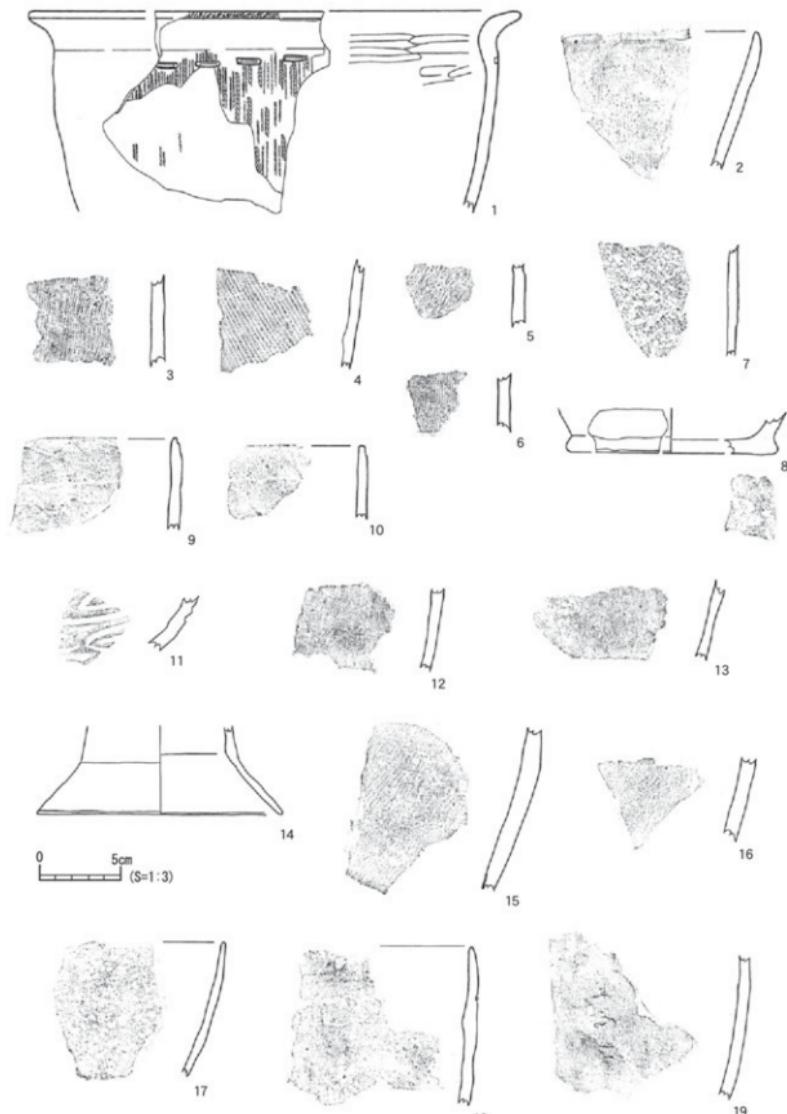
弥生土器、土師器、製塙土器が出土した。1は弥生中期の甕である。口縁部～頸部はヨコナデ、体部直下に横長の列点文（破線文）が巡る。体部は合撫の原体を施文している。2は土師器の破片である。3は合撫の原体を施文する体部破片で1と同一個体の可能性が高い。4は植物の茎を回転させて縄文風の文様を施文した破片である。5・6は反撫や燃糸文、綾絡文が施文される弥生土器の体部である。11は弥生前期の鉢で、沈線による変形工字文が施



0 5cm (S=1:2)

1:2層、2:3層、3~9:10層、10:16層、11:18層、12~17:25層

第11図 B地点出土土器(1)



※14は縮尺1/3

1~8・10:26層、9:27層、11~13:29層、14~19:31層

第12図 B地点出土土器(2)



1~4 : 31層、5~7 : 32層、8・9 : 33層、10・11・14・15 : 34層、12・13・16 : 38層、17 : 表採、18 : 5層上面

第13図 B地点出土土器(3)・骨角製品

文される。7～10・12・13は製塙土器である。色調は明赤褐色～にぶい黄橙色など様々な色調のものがあり、内外面の色調が異なるものもある。

31層出土遺物（第12図14～19、第13図1～4）

弥生土器、製塙土器が出土した。14は弥生時代の蓋である。15・16は撲糸文が施された体部破片である。17～19・1～4は製塙土器である。色調は明赤褐色～褐灰色を呈する。調整が荒いものと丁寧なものがある。4は底部に網代痕をもつ。

32～34層出土遺物（第13図5～11・14・15）

縄文土器、弥生土器、製塙土器が出土した。5・7は内外面の剥離や磨滅が著しい。8は縄文晚期の鉢である。6・9・10・11・14・15は製塙土器である。13は尖底風丸底になるとと思われる。

38層出土・表採遺物（第13図12・13・16・17）

縄文土器、製塙土器が出土した。12は撲りの異なる縄文原体で羽状縄文風に施文する縄文晚期の破片である。13・16・17は製塙土器の体部と底部で、外面の剥離が著しい。16は底部に布目压痕が残る。

(2) 石製品（第9図16）

石製品は、A地点の北側トレーニング18層から凝灰岩製の石製品が出土した。製品の端部に2か所の貫通孔があるが、穿孔方向がそれぞれ異なっている。欠損部分が多いが、貫通孔の位置などから垂飾品などの用途が考えられる。

(3) 骨角製品（第9図17、第10図1～4、第13図18）

骨角製品は、A地点から骨籠が5点、B地点から鈎が1点出土した。骨籠は、A地点北側トレーニング付近から出土した。素材はニホンジカの中足骨である。9図17は、ニホンジカの中足骨を分割し、遠位端を平滑に加工した骨籠の製品である。遠位端に向かって薄くなるように分割されている。籠部分の表面と裏面には、使用に伴う横位や斜位の擦痕が見られる。10図1は、同じくニホンジカの中足骨を分割した骨籠の未使用品である（註1）。断面には分割する際に使用されたくさび状又はノミ状の工具痕が観察でき、分割後に磨かれている。10図2は、同じくニホンジカの中足骨を加工した骨籠の製品である。熱による白色灰化が見られるが、遠位側に斜め方向の擦痕が観察できる。10図3は、ニホンジカの中足骨を分割した骨籠と考えられるが、遠位端の欠損により生じた尖端部を研磨していることから、骨籠とは別の用途も考えられる。10図4は、同じくニホンジカの中足骨を分割した骨籠の未製品である。5点の資料中で最も長く、分割面にはくさび又はノミ状の工具痕も明瞭に残っている。

鈎は、B地点5層上面から出土した。柄の先をソケットに装填する開窓式離頭鈎である。素材は鹿角の枝部分で、素材の湾曲を利用して作られている。先端と尾部は同様に仕上げら

れている。表面と側面には軸に平行する削りの痕跡が観察できる。器体中央のやや下に幅2cmの浅い溝を作り出しており、引綱を装着する部分と考えられる。ソケット部は背部の軸質部を尾部から体部中央まで溝状に削って作っている。

(4) 動物遺存体

動物遺存体は、A地点の2a・5・6・18・23・26層、B地点の4・5・8～15・17・18・20・22・23・25～27・31・32・33層で出土している。今回の調査は遺物包含層の一部を発掘したに過ぎず、本貝塚における狩猟や漁撈活動、貝採集活動などの生業や周辺環境について復元するまでは至らなかった。同定された動物遺存体は、貝類3綱21種、魚類2綱1目2科2種、陸生哺乳類2目2科1種、海生哺乳類は1類1科、爬虫類1目1科である(第3・4表)。鳥類は種の同定に至ったものはなかった。

貝類	二枚貝綱	オオノガイ、イガイ、アヅマニシキガイ、ヤマトシジミ、シオフキガイ、サルボウガイ、カリガネエガイ、オキシジミ、ハマグリ、アサリ、マガキ
	腹足綱	アカニシ、ウミニナ、スガイ、イボニシ、レイシガイ、スガイ、アワビ、ノボリガイ、イボキサゴ
	掘足綱	ヤカドツノガイ
魚類	硬骨魚綱	スズキ科 スズキ、カレイ科 ヒラメ
	軟骨魚綱	サメ目
哺乳類	陸生哺乳類	ウシ目 シカ科 ニホンジカ ネコ目 イヌ科
	海生哺乳類	鰐脚類 アシカ科
爬虫類	カメ目	ウミガメ科

貝類は、A地点北側トレンチ5・6・18層から出土し、18層がその大半を占め、アサリやウミニナの出土量が多い。出土総数が少ないため、層別の貝類組成変化について言及することは難しい。B地点は、11・15・17・22層からの出土が多く、17層からまとまって出土している。特にアサリやマガキ、スガイを出土する層が多く、出土点数も多い。12層ではマガキの割合が高いのに対して17・22層はアサリの割合が高い。

魚類は、A地点北側トレンチからスズキの上舌骨・口蓋骨・後側頭骨・角骨、ヒラメの前鰓蓋骨、サメの椎骨が出土した。種を同定できなかったが、主上顎骨と鰓棘も出土している。B地点からはスズキの後側頭骨が1点出土した。

陸生哺乳類は、両地点から出土している。A地点北側トレンチからニホンジカの角・下頸骨・中足骨・足根骨・末節骨、イヌの下顎骨が出土している。B地点では、ニホンジカの角、肋骨、中節骨が出土した。A地点北側トレンチ出土のシカ中足骨は遠位端のみが出土した。

A 地点出土哺乳類・爬虫類骨数量表

種 別	2a層	5層	6層	18層	26層	表採	合計
陸生哺乳類							
シカ 角			1			1	
シカ 下顎骨		1				1	
シカ 中足骨		2	1			3	
シカ 足根骨	1					1	
シカ 末節骨			1			1	
イヌ 下顎骨	1					1	
種不明 椎骨				1		1	
種不明 肋骨			1			1	
種・部位不明	7	4	5	2	2	20	
海生哺乳類							
アシカ科 脛骨	1					1	
爬虫類							
ウミガメ科		3				3	
合計	7	10	8	6	2	1	34

B 地点出土哺乳類・魚骨数量表

種 別	10層	11層	18層	25層	33層	合計	
陸生哺乳類							
シカ 角	1					1	
シカ 肋骨	1			1	2		
シカ 中節骨		1				1	
種不明 寛骨	1				1		
種不明 肋骨	1			1	2		
種・部位不明		2		1		3	
魚類							
スズキ 後側頭骨			1			1	
合計	4	3	1	2	1	11	

第3表 清水洞窟貝塚出土動物骨数量表

A 地点出土貝類数量表

貝 種	5層	6層	18層	表採	合計
二枚貝綱	オオノガイ		1		1
	イガイ		2		2
	アツマニシキガイ		1		1
	サルボウガイ		1		1
	オキシジミ	1	1		2
	ハマグリ		2	1	3
	アサリ	6	1	7	
腹足綱	アカニシ	1	3		4
	ウミニナ		5		5
	スガイ		1		1
	アワビ		1		1
堀足綱	ヤカドツノガイ	1		1	
合 計	2	2	23	2	29

B 地点出土貝類数量表

	4層	5層	8層	9層	10層	11層	12層	13層	14層	15層	17層	20層	22層	23層	25層	26層	27層	31層	32層	合計
二枚貝綱	オオノガイ			1																1
	イガイ									1	8			2		1		12		
	ヤマトシジミ	2	1	1															4	
	カリガネエガイ										1								1	
	シオフキガイ	1								2			2				1		6	
	マガキ	4	3	2	7	7	16	8	7	9	10	4	12	7		1			97	
	オキシジミ	1				2					1							2	6	
腹足綱	ハマグリ	1		3	4				1	1	2			1					13	
	アサリ	5	2	2	6	3	4	2	10	41	24	6		2			4	111		
	アカニシ	1	4		1	9				1								16		
	イボニシ					1	1	2					2					6		
	レイシガイ																	1	1	
	ウミニナ	1	1			2			1	1	1								7	
	スガイ		6		1	5	3	3	2	10	5	2	4		2	2	2		47	
堀足綱	イボキサゴ										1								1	
	ノボリガイ												3						4	
	合 計	2	7	22	5	15	37	23	17	13	33	72	9	42	15	5	5	2	7	333

第4表 清水洞窟貝塚出土貝類数量表

A 地点出土鳥類骨数量表

種 別	6層	18層	23層	表採	合計
スズキ 上舌骨	1				1
スズキ 口蓋骨		1			1
スズキ 衝骨			1	1	1
スズキ 後側頭骨	1				1
スズキ 角骨		1			1
ヒラメ 前鰓蓋骨	1				1
サメ目 雜骨	1				1
種不明 主上頸骨			3		3
種不明 尾椎	1				1
種不明 鰭棘	2	2			4
種・部位不明			2	2	2
合計	3	7	6	1	17

これは隣接地から出土した骨籠の素材となっている中足骨の遠位端の可能性が高い。遠位端と骨籠との接合を試みたが、骨籠は遠位端を加工・研磨しているため、接合するものはなかった。海生哺乳類については、A地点でアシカ科の肺骨が1点出土している。

爬虫類はカメ目ウミガメ科が同定されている。A地点の北側トレンチ5層からは切断された背甲骨板の破片3点出土している。

鳥類はA地点から種不明の上腕骨が2点出土している。うち1点は、上腕骨の中央部から折られており、断面周辺は煤が付着している。

第4章 考 察

1. 出土土器

本調査で出土した点数はA地点で572点、B地点で435点である。出土土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塙土器と多岐にわたるが、その多くは製塙土器の破片である。出土資料はすべて破片で、全体形を把握できた資料は少なく、器種の認定と時期判定は極めて困難であった。これらの出土遺物については、施文技法や器形から時期判定可能なものを以下に5分類し、若干の特徴をまとめた。

1類 縄文時代晩期に比定されるもの 5図9・13、6図5・6・8・9、9図2、13図8・12

縄文時代晩期後半に比定される資料である。器種は深鉢と鉢がある。深鉢は体部に羽状縄文や単節縄文が施文される。鉢は平行沈線、刻目、単節縄文が施文される。縄文を地文とする3類土器の中には本類に含まれる資料も多いと思われる。

2類 弥生時代に比定されるもの

5図1・6・12、6図11・19・23、7図11～13、8図5・7、11図5・9、12図1・11・14

弥生土器は、弥生時代前期～後期の破片が出土している。器種は甕、壺、鉢、蓋がみられる。甕は、頸部のくびれが弱く口縁部がやや外反するもの(7図11)と頸部のくびれが強く口縁部が外反するもの(12図1)がみられる。体部には単節縄文や付加条が施文される。頸部と体部の境に列点文が巡るものもある。壺は肩部や頸部の破片が出土している。蓋は推定口径15cmの蓋の破片が1点出土している。つまみの有無は不明だが、内外面ハケメやナデ調整が施されている。文様は沈線による変形工字文(7図12)や2条1組の沈線文(8図7)、山形文(5図1、7図13)がある。鉢は沈線による変形工字文が描かれる。

全体としては、本貝塚出土の弥生土器は前期と後期の資料が少なく、中期の資料が多い傾向にある。A地点では縄文晩期後半から弥生後期前半までの土器が出土しているが、B地点では弥生後期の土器が出土していないという違いがみられる。

3類 繩文または燃糸文を地文とするもの

5図2・7・11・14～16・20、6図10・12～14・20～22・24、7図1・14～16、8図6、9図3～5・7、11図6・7・11・12・15～17、12図3～6、13図5・7

本貝塚から多く出土している縄文や燃糸文を地文とする破片資料を3類とした。本類の大半は弥生時代に属するものであるが、一部縄文晚期のものを含んでいると考えられる。弥生中期の土器体部には単節縄文や合燃、反燃、直前段反燃など多様な原体が使われており、カナムグラなどの植物茎を回転して縄文風の施文をしているもの(11図11など)もみられる。

4類 古代に比定されるもの

5図3・8・10、6図7・15、7図2～4、9図1、11図3・4・10、12図2

本類は土師器と須恵器が含まれ、土師器は11点、須恵器は1点出土している。土師器は壺、壺、甕が認められるが、全体形が捉えられるのは壺のみである。壺は底部から口縁部に外反しながら立ち上がる器形で、ロクロ成形である。外面はロクロナデ、内面はナデ調整後に黒色処理を施している。底部は回転糸切りによる切り離しを行っている。赤色顔料塗付した土師器片も出土している(5図10、7図2)。須恵器は甕または蓋と思われる。

5類 製塙土器

本貝塚で出土した製塙土器の多くが、長時間の加熱により土器の内外面が剥離しているものであった。破片は口縁部、体部、底部の各部位が出土しているが、全体の器高や口径の分かる資料は少なく、全体形を復元できる資料はなかった。成形は粘土輪積みまたは粘土巻き上げによるものとみられる。調整については、内面がナデ、ヘラナデ、ミガキ調整により平滑に整えられているが、外面の調整は内面に比べて粗雑で、粘土の重ね目が残るものがある。器厚は2～3mmの薄手のものと5～7mmの厚手のものがある。製塙土器は、一般的に内面は丁寧な調整が施されるが、外面は粘土輪積み痕などの成形痕を残し、荒い調整のみで無文に仕上げたものが多い。出土した製塙土器はいずれも破片で、体部や口縁部の破片の分類や時期判定は難しく、底部形態から以下の4細分した。

5a類 平底で、器形がたらい形または円筒形になるもの 11図1

平底で、底部縁辺が外側にやや張り出し、胴部～口縁部に向けてはほぼ垂直に立ち上がる器形のもので、B地点2層や10層で出土している。11図1は底部が体部より薄く、調整は内外面ナデである。同様のものは、本町水浜遺跡や長須賀遺跡、塩釜市新浜遺跡などで出土している。

A地点出土土器数量表

	1a層	2a層	5層	6層	14層	17層	18層	19層	22層	23層	28層	表採	合計	
1類	口縁部	1						3	1	1	1	7		
	体部	3						1	1	1		6		
2類	口縁部	1		6							2		9	
	体部	1		4			3				3	11		
3類	口縁部	3	1	4	6	1		3	6		1	1		
	体部	2	1	4				1	4		3	15		
4類	口縁部	8	2	6	1			1			1	9	28	
	体部	1		1							1	3		
5a類	底部											3	3	
5b類	底部			2		2				1	2	1	8	
5c類	底部	1	2	4			18	6				7	38	
5d類	口縁部	4	1	4	4	5	4	12	12	1	12	4	63	
	体部	15	28	2	15	13	53	122	15		26	59	348	
	合計	35	6	53	28	22	19	90	155	18	3	48	95	572

B地点出土土器数量表

	2層	3層	4層	9層	10層	14層	16層	18層	25層	26層	27層	28層	29層	31層	32層	33層	34層	38層	表採	合計	
1類	口縁部								2										2		
	体部								1										3		
	底部												1								
2類	口縁部					1					1								2		
	体部				1						1								3		
	底部				2			1	4	4				2	2				15		
3類	口縁部										2									7	
	体部																			8	
	底部					1	4													1	
4類	口縁部					1	5	1	1											12	
	体部					1														39	
	底部					2														334	
5a類	底部	2				3													5		
	底部											2						1	3		
5b類	底部																			12	
	底部					2				3	1		1	2	2	2	1	2	2	39	
5c類	口縁部	1		8					3	5	1	1	2	10	1	3	2	2	1	334	
	体部	2	6	110					25	30	11	11	33	12	27	20	28	19			
	合計	4	1	6	2	137	1	1	2	35	46	1	12	16	47	15	33	24	31	21	435

第5表 清水洞窟貝塚出土土器数量表

5 b類 尖底または尖底風丸底のもの 6図3・4・17・18、7図5、8図3、13図13

縄文時代晩期～弥生時代に属すると思われる製塙土器で、A地点東側トレンチ・北側トレンチから5 c類と混在して出土している。本貝塚ではまとまった出土ではなく、出土量も少ない。器形は深鉢形と考えられ、内外面ともにヘラナデやナデ調整されている。

5 c類 平底のもの

5図5・17～19、7図6～10、8図3・4・11～19、9図6・13～15、11図8・13・14、12図8、13図4・9・14～16

縄文時代晩期～弥生時代に属すると思われる製塙土器で、A・B両地点から出土している。底径が3～10 cmの平底で、外傾しながら立ち上がる器形のものが本類に含まれる。底面には木葉痕や網代痕、布目痕が認められる。器形は深鉢形で、底部縁辺が外側に張り出すもののがみられる。調整は外面がヘラナデや指ナデ、内面はヘラナデやナデ調整されている。器厚は体部より底部が薄いものや底部と体部の厚さが同じものなどがある。

5 d類 口縁部や体部の破片で、底部形態が不明なもの

5図4・21・22、6図1・2・16、7図17・18、8図1・2・8～10、9図8～12、11
図2、12図7・9・10、12・13・17～19、13図1～3・6・10・11・17

製塙土器の口縁部と体部の破片のもので、A・B両地点で最も出土量が多い。調整は外面がヘラナデや指ナデ、内面はヘラナデやナデ調整されている。器厚は体部より底部が薄いものやその逆のもの、底部と体部の厚さが同じものなどがある。

本貝塚から出土した製塙土器の口縁部は、口縁部外面を削いだように断面が尖っているもの、調整によって口縁端部に粘土がはみ出し、口唇部に段や溝ができるものがみられる。口縁部は、直立や外傾するものと口縁部の端部に向かってやや内湾するものがみられる。

A地点北側トレンチ18層から、外面が幅5～8mmの縦位又は、斜位のケズリ風ヘラナデ、内面がミガキ風ナデで丁寧に調整されている製塙土器(8図11～13など)が出土している。底部付近では右下から左上へのナデ調整が行われている。底部形態は布目痕などをもつ平底で、深鉢形になると考えられる。類似した資料は、塩釜市新浜B遺跡10～18層から出土している(報告書P35 106～114)。新浜B遺跡出土の資料は口縁部のみであるが、8図11～13・15・18・19は新浜B遺跡例の体部や底部に相当するものと考えられる。

松島湾内では、これまで縄文時代晩期、弥生時代、奈良・平安時代の製塙土器が出土している。古墳時代については確実な例がなく、弥生時代の製塙土器についても資料が不足している状況である。里浜貝塚西畠・西畠北地点(東松島市)や二月田貝塚から縄文晩期中葉から後葉の大洞C1式～A式に属する製塙土器が出土しており、底部形態が平底から尖底に徐々に変化することが明らかになっており、弥生時代には東宮貝塚などの例から、尖底と平底が共伴することも明らかになっている。本貝塚からは尖底と平底の製塙土器が混在して出土し、その大半が平底のものである。しかし、共伴する土器も縄文地文の破片が多く、これらの正確な時期判定は難しいが、本貝塚から出土した製塙土器は弥生時代を中心とする時期の資料であると考えられる。本調査ではこれらに伴う明確な製塙炉の検出はなかったが、包含層断面には製塙炉に伴うと思われる灰層や焼土層が複数確認されていることから、洞窟内では一定期間継続して製塙が行われていたことが想像される。

2. 骨角製品

骨籠

A地点北側トレンチ出土の骨籠は、共伴する土器などから弥生時代に属すると考えられる。本資料は、ほぼ同じサイズのニホンジカの中足骨を素材として、中足骨の遠位端を基部から除去し、クサビやノミ状の工具を使って前後に縫溝を入れて2分割するという加工が行われている。分割に際しては、近位端から遠位端までまっすぐ分割するのではなく、籠部分となる遠位端側が薄くなるように斜めに分割している。分割後、遠位端に籠部分を作り出し、

分割した断面を磨いて滑らかに仕上げている。同様の分割例は、気仙沼市田柄貝塚(縄文時代後期)や山王遺跡八幡地区(古墳時代後期)などの例が挙げられ、縄文時代後期からほぼ同様の分割が行われていたようである。山王遺跡八幡地区は分割する箇所が本資料と異なるが、これは製作する製品の用途や形状によって素材の取り方が異なると考えられる。以上のことから、縄文時代から古墳時代までの長期間にわたり、中手・中足骨からの素材の取り方が変化しなかったと考えられ、本資料は弥生時代における良好な資料と言えるだろう。

銛

本貝塚からは、昭和 17 年の調査の際もやや小型ではあるが 1 点出土している。類似資料は、多賀城市山王遺跡八幡地区から古墳時代後期のものが 1 点、東松島市江の浜貝塚から平安時代のものが 1 点、塩釜市菜ヶ崎貝塚から奈良・平安時代のものが 1 点出土している。本資料は山王遺跡八幡地区の銛と形態的に類似している。銛先の長さや器体中央の溝の幅などの違いがあるが、古墳時代～平安時代の開窓式離頭銛は、基本的な形態は類似しており、同様の形態が長期にわたって製作されていたことが分かる。本資料は共伴する土器がなく詳細な時期判定が難しいが、製作技法や類似資料などから、古代の銛であると考えられる。

第5章　まとめ

1. 清水洞窟貝塚は、宮城県中南部の宮城郡七ヶ浜町代ヶ崎浜字清水地内に所在する。遺跡は松島四大観多聞山の南西麓の海蝕洞窟内に立地する。
2. 本調査は代ヶ崎浜地区急傾斜地崩落防止事業を原因として実施し、調査地は海蝕洞窟 2 か所で、調査面積約 100 m²である。
3. 調査では、両洞窟内でカキやアサリ主体とする貝層と製塩に伴うと思われる複数の灰層や焼土層などを含む遺物包含層を確認した。
4. 遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、石製品、骨角製品、動物遺存体が出土した。縄文土器は縄文晚期後半、弥生土器は弥生前期～後期前半のものが出土している。
5. 製塩土器は縄文晚期後半～古代のものが出土した。底部形態は尖底、尖底風丸底、平底のものがあり、その多くが平底である。
6. 骨角製品は、骨鏃と開窓式離頭銛が出土した。骨鏃は、ニホンジカの中足骨を素材としたもので、シカの中足骨の分割や加工方法を知る貴重な資料である。開窓式離頭銛は、その形態や加工痕などから、古代に属する資料と考えられる。
7. 調査の結果、2 か所の海蝕洞窟は縄文時代晚期～古代に廃棄場(貝塚)、製塩場、墓地など様々な用途に利用されていたことが明らかになった。両洞窟の出土遺物の検討から、弥

生時代後期前半段階には、B地点の洞窟が利用されなくなっている可能性が高く、A地点の洞窟の利用期間がやや長いと考えられる。

8. A地点奥壁側で確認した擾乱層は、川崎正文、大場利夫による昭和17年の調査地点と思われる。

註1 報告書の執筆段階で、動物遺存体として扱っていたニホンジカの中足骨遠位端の破片と接合し、10図4と同様の未使用品と判明した。写真図版6-21は接合後の状況である。

【引用・参考文献】

- 荒井格ほか 2000『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集 仙台市教育委員会
石井武政ほか 1983『塩竈地域の地質』『地域地質研究報告』地質調査所
大場利夫 1943『清水洞窟発掘報』『縄紋』2 縄紋文化研究会
大場利夫 1948『清水洞窟出土の文化遺物』『縄紋』4 縄紋文化研究会
加藤孝 1959「考古学上より見た塩竈周辺の遺跡」『塩竈市史』Ⅲ 別編Ⅰ 塩竈市史編纂委員会
加藤孝 1968「宮戸島貝塚寺下地区出土品に見られる弥生式文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県の地理と歴史第3集 宮城教育大学歴史研究会
加藤道男 1989『仙台湾周辺の製塩遺跡』『東北歴史資料館研究紀要』15 東北歴史資料館
川村正 1992『水浜遺跡』七ヶ浜町文化財調査報告書第8集 七ヶ浜町教育委員会
小井川和夫・加藤道男 1988『里浜貝塚Ⅶ』東北歴史資料館資料集22 東北歴史資料館
須藤隆 1998『第四章 弥生時代の生活と技術』『仙台市史』通史編Ⅰ 原始 仙台市史編さん委員会
東北歴史資料館 1985『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集 25 東北歴史資料館
多賀城市 1991『多賀城市史』第4巻 考古資料
西本豊弘 2005『動物骨格図集(3)』『動物考古学』22号
藤沼邦彦 1983『里浜貝塚Ⅱ』東北歴史資料館資料集7 東北歴史資料館
藤沼邦彦ほか 1986『塩釜市新浜遺跡』宮城県文化財調査報告書第113集 宮城県教育委員会
松井章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会
真山悟ほか 1989『葉ヶ崎貝塚』『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集
村田晃一 2001『山王遺跡八幡地区の調査2』県道『泉-塩釜線』関連調査報告書IV 宮城県文化財調査報告書第186集 宮城県教育委員会
山崎京美・上野輝綱 2008『硬骨魚類の頭と歯』

A地点 東側トレントチ出土遺物観察表

採取日	層位	種別	分類	器種	高さ	口径	底径	外側調整	内面調整	口唇部・底部	備考	幅員
5-1	la	弥生	2類	壺	(3.0)	△106	-	平行沈線文、山形文	ナデ			1/2
5-2	la	縄文・弥生	3類		(6.2)	-	-	LR 縄文、スヌ付着	ナデ			1/3
5-3	la	土師器	4類	壺	(3.5)	-	-	ハケメ、ナデ	ハケメ			1/2
5-4	la	鉢	5d類	(5.3)	△152	-	-	ナデ、灰白色付着物、削離	ナデ			1/3
5-5	la	鉢	5c類	(3.1)	-	-	△4.4	ハラナデ、灰白色付着物	ハラナデ	底部：網代瓶	1/2	
5-6	2a	弥生	2類	壺	(3.2)	-	-	平行沈線文	RL 縄文	ナデ		1/2
5-7	2a	縄文・弥生	3類		(4.7)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
5-8	2a	土師器	4類	壺	4.2	13.5	6.7	クロコナデ	ヘラミガキ、黒色乳理	底部：回転系切り		1/2
5-9	5	縄文	1類	鉢	(2.8)	-	-	平行沈線文	ミガキ	沈線文、ミガキ	口唇部：赤色顔料	1/2
5-10	5	土師器	4類	壺	(2.0)	-	-	ナデ、赤色顔料雲母	ナデ			1/2
5-11	5	土師器	4類	壺	(2.5)	-	-	ハケメ	ハケメ			1/2
5-12	6	弥生	2類	壺	(1.7)	-	-	平行沈線文	ナデ			1/2
5-13	5	縄文	1類		(3.6)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
5-14	5	縄文・弥生	3類		(4.2)	-	-	RL 縄文	ナデ			1/2
5-15	5	縄文・弥生	3類	甕	(5.8)	-	-	植物茎回転文	ナデ			1/2
5-16	5	縄文・弥生	3類	甕	(2.8)	-	-	焼文	ナデ			1/2
5-17	5	鉢	5d類	(3.2)	-	-	ナデ	ハラナデ	ハラナデ		1/2	
5-18	5	鉢	5c類	(1.4)	-	△6.2	ミガキ	ナデ				1/2
5-19	5	鉢	5c類	(2.4)	-	△5.4	ミガキ	ナデ		底部：木葉痕		1/2
5-20	14	縄文・弥生	3類		(7.0)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
5-21	14	鉢	5d類	(4.2)	-	-	ナデ	ナデ			1/2	
5-22	14	鉢	5d類	(5.1)	-	-	ナデ	ナデ			1/2	
6-1	14	鉢	5d類	(4.8)	-	-	ナデ、灰白色付着物	ナデ			1/2	
6-2	17	鉢	5d類	(2.8)	-	-	ケズリ、ハラナデ	ナデ			1/2	
6-3	17	鉢	5b類	(1.6)	-	-	ナデ	ハラナデ	ハラナデ		1/2	
6-4	17	鉢	5b類	(3.0)	-	-	ナデ、灰白色付着物	ナデ			1/2	
6-5	19	縄文	1類		(3.4)	-	-	RL 縄文	ナデ			1/2
6-6	19	縄文	1類	甕	(3.8)	-	-	羽状縄文	ナデ			1/2
6-7	19	土師器	4類	壺	(3.4)	-	-	ナデ	黒色乳理、ミガキ			1/2
6-8	22	縄文	1類	甕x(?)	(1.8)	-	-	口脣部刻目、灰付着	ナデ	口脣部：刻目		1/2
6-9	22	縄文	1類		(2.2)	-	-	LR 縄文、沈線文、灰付着	ナデ			1/2
6-10	28	縄文・弥生	3類		(2.9)	-	-	LR 縄文	ミガキ			1/2
6-11	28	弥生	2類		(3.5)	-	-	羽状縄文	LR 縄文			1/2
6-12	28	弥生	2類		(3.4)	-	-	RL 縄文	ナデ	口脣部：縄文		1/2
6-13	28	縄文・弥生	3類		(2.8)	-	-	LR 縄文	ミガキ			1/2
6-14	28	縄文・弥生	3類		(3.3)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
6-15	28	土師器?	4類		(3.3)	-	-	ハケメ	ナデ			1/2
6-16	28	鉢	5d類	(3.3)	-	-	ナデ	ナデ			1/2	
6-17	28	鉢	5d類	(3.0)	-	-	ナデ	ハラナデ、灰白色付着物	ハラナデ		1/2	
6-18	28	鉢	5b類	(2.7)	-	-	ナデ	ハラナデ	ハラナデ		1/2	
6-19	表抜	弥生	2類		(2.4)	-	-	平行沈線文	LR 縄文	ミガキ		1/2
6-20	表抜	縄文・弥生	3類		(3.3)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
6-21	表抜	縄文・弥生	3類		(3.7)	-	-	焼文	ナデ			1/2
6-22	表抜	縄文・弥生	3類		(2.6)	-	-	無筋縄文	ナデ			1/2
6-23	表抜	弥生	2類		(2.5)	-	-	沈線、RL 縄文、ナデ	ナデ			1/2
6-24	表抜	縄文・弥生	3類		(2.5)	-	-	RL 縄文	ナデ			1/2
7-1	表抜	縄文・弥生	3類		(2.5)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
7-2	表抜	土師器	4類	甕	(3.0)	-	-	ミガキ、赤色顔料	ナデ	赤色顔料		1/2
7-3	表抜	土師器	4類	甕	(3.0)	-	-	ミガキ、沈線文、ハケメ痕	ナデ			1/3
7-4	表抜	土師器	4類	甕	(4.9)	-	-	ナデ	ハラナデ	底部：ハラナデ		1/3
7-5	表抜	鉢	5b類	(6.9)	-	-	剥離	ハラナデ			1/3	
7-6	表抜	鉢	5c類	(2.8)	-	△6.6	ミガキ	ハラナデ	底部：網代瓶		1/2	
7-7	表抜	鉢	5c類	(2.5)	-	△5.6	ミガキ	ナデ	底部：網代瓶		1/2	
7-8	表抜	鉢	5c類	(2.2)	-	△6.2	ミガキ	ミガキ	底部：布目痕		1/2	
7-9	表抜	鉢	5c類	(1.5)	-	△6.6	ミガキ	剥離	底部：網代瓶		1/2	
7-10	表抜	鉢	5c類	(1.7)	-	(2.8)	ミガキ	ナデ	底部：木葉痕		1/2	

A地点 北側トレントチ出土遺物観察表(1)

採取日	層位	種別	分類	器種	高さ	口径	底径	外側調整	内面調整	口唇部・底部	備考	幅員
7-11a	6	弥生	2類	甕	(8.8)	△247	-	LR 縄文	ミガキ			1/3
7-11b	6	弥生	2類	甕	(7.8)	-	-	ミガキ	ミガキ			1/3
7-12	6	弥生	2類	甕	(3.6)	-	-	平行沈線文、交互斜文	ナデ	口脣部：LR 縄文		1/2
7-13	6	弥生	2類	甕	(8.2)	-	-	直前段反彎？、山形文	ナデ			1/2
7-14	6	縄文・弥生	3類		(3.3)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
7-15	6	縄文・弥生	3類		(2.3)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
7-16	6	縄文・弥生	3類		(3.1)	-	-	LR 縄文	ミガキ			1/2
7-17	6	鉢	5d類	(3.8)	-	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2
7-18	6	鉢	5d類	(5.0)	-	-	-	ナデ	ナデ			1/2
8-1	6	鉢	5d類	(3.9)	-	-	-	ナデ	ナデ			1/2
8-2	6	鉢	5d類	(5.6)	-	-	-	ナデ	横ミガキ			1/2
8-3	6	鉢	5b類	(2.0)	-	1.0	△1.8	ミラナデ	ミラナデ			1/2
8-4	6	鉢	5c類	(2.0)	-	△3.8	ミラナデ	ミラナデ	ナデ	底部：木葉痕		1/2
8-5	18	弥生	2類		(1.9)	-	-	平行沈線文	ナデ			1/2
8-6	18	縄文・弥生	3類		(2.4)	-	-	焼文	ナデ			1/2
8-7	18	弥生	2類	甕	(3.3)	-	-	平行沈線文	ナデ			1/2
8-8	18	鉢	5d類	(6.4)	-	-	-	ナデ、剥離、灰白色付着物	ナデ			1/3
8-9	18	鉢	5d類	(8.3)	-	-	-	剥離	ナデ			1/3
8-10	18	鉢	5d類	(5.2)	-	-	-	ナデ	ナデ			1/2
8-11	18	鉢	5c類	(4.9)	-	-	-	ナデ	ハラナデ			1/3
8-12	18	鉢	5c類	(4.8)	-	-	-	ナデ	ハラナデ、灰白色付着物	ナデ		1/3
8-13	18	鉢	5c類	(4.2)	-	-	-	ナデ	ハラナデ、一部剥離	ミガキ		1/2
8-14	18	鉢	5c類	(1.7)	-	△9.6	ナデ	ミガキ	ミガキ	底部：木葉痕		1/2
8-15	18	鉢	5c類	(4.1)	-	-	-	ナデ	ハラナデ	ハラナデ		1/2
8-16	18	鉢	5c類	(1.4)	-	△6.0	ナデ	ミガキ	ミガキ	底部：木葉痕		1/2
8-17	18	鉢	5c類	(2.8)	-	3.8	ミガキ	ミガキ	ミガキ	底部：木葉痕		1/2
8-18	18	鉢	5c類	(7.0)	-	△6.0	ミガキ	ミガキ	ミガキ	底部：木葉痕		1/3
8-19	18	鉢	5c類	(6.3)	-	△6.1	ミガキ	ミガキ	ミガキ	底部：木葉痕		1/3
9-1	9	土師器	4類	壺	(2.5)	-	-	クロコナデ	黒色乳理、ナデ			1/2
9-2	19	縄文	1類	鉢	(3.1)	-	-	平行沈線文	ミガキ	平行沈線文、ミガキ		1/2
9-3	19	縄文・弥生	3類		(4.6)	-	-	LR 縄文	ミガキ	ミガキ		1/2
9-4	19	縄文・弥生	3類		(3.0)	-	-	LR 縄文	ミガキ	ミガキ		1/2
9-5	19	縄文・弥生	3類		(7.0)	-	-	LR 縄文	ナデ			1/2

A 地点 北側トレント出土遺物観察表(2)

探査番号	層位	種別	分類	器種	高さ	口径	底径	外面調整	内面調整	口唇部・底部	備考	縮尺
9-6	19	製塙	5c 類	(2.3)	-	△ 7.6	RL 細文	ナデ、剥離	ナデ、剥離	底部:木葉痕?		1/2
9-7	19	繩文・先住	3 類	(4.3)	-	-	RL 細文	ミガキ				1/2
9-8	19	製塙	5d 類	(6.0)	-	-	ナデ	ナデ、剥離	ナデ、剥離			1/2
9-9	19	製塙	5d 類	(7.1)	-	-	ナデ	ナデ、剥離	ナデ			1/2
9-10	19	製塙	5d 類	(4.3)	-	-	ナデ	ナデ、剥離	ヘラナデ			1/2
9-11	19	製塙	5d 類	(3.6)	-	-	ナデ	灰白色付着物	ナデ			1/2
9-12	19	製塙	5d 類	(7.5)	-	-	剥離	ナデ				1/3
9-13	19	製塙	5c 類	(1.6)	-	△ 3.9	ナデ	ナデ				1/2
9-14	19	製塙	5c 類	(1.8)	-	△ 3.5	ヘラナデ	ナデ	底部:剥離			1/2
9-15	19	製塙	5c 類	(2.5)	-	△ 5.2	ヘラナデ	ナデ	底部:木葉痕			1/2

B 地点出土遺物観察表

探査番号	層位	種別	分類	器種	高さ	口径	底径	外面調整	内面調整	口唇部・底部	備考	縮尺
11-1	2	製塙	5a 類	(2.3)	-	△ 8.8	ナデ	ナデ				1/2
11-2	3	製塙	5d 類	(7.3)	-	-	ナデ	ハケメ				1/2
11-3	10	土師器	4 類	甕	(2.0)	-	△ 6.8	ヘラナデ	ヘラナデ			1/2
11-4	10	土師器	4 類	甕	(2.8)	△ 14.4	-	ナデ	ナデ			1/2
11-5	10	先住	2 類	(3.6)	-	-	ナデ	筋節繩文(縦回転)	ナデ			1/2
11-6	10	繩文・先住	3 類	(3.4)	-	-	LR 細文	ナデ				1/2
11-7	10	繩文・先住	3 類	(4.4)	-	-	RL 細文	沈線	ナデ			1/2
11-8	10	製塙	5c 類	(1.2)	-	△ 5.8	ヘラナデ	ヘラナデ				1/2
11-9	10	先住	2 類	鉢	(4.0)	△ 16.4	-	変形工字文、ミガキ	沈線、ミガキ	底部:木葉痕		1/2
11-10	18	土師器	4 類	甕	(0.8)	-	-	ナデ	ナデ			1/2
11-11	18	繩文・先住	3 類	(1.9)	-	-	植物茎回転文	ナデ				1/2
11-12	25	製塙	5c 類	(3.3)	-	-	植物茎回転文	ナデ				1/2
11-13	25	繩文・先住	3 類	(0.7)	-	△ 8.1	ナデ	ナデ、剥離	底部:木葉痕			1/2
11-14	25	製塙	5c 類	(0.7)	-	(7.5)	RL 細文	ミガキ	底部:木葉痕			1/2
11-15	25	繩文・先住	3 類	(3.3)	-	-	植物茎回転文	ミガキ				1/2
11-16	25	繩文・先住	3 類	(3.2)	-	-	RL 細文	ナデ				1/2
11-17	25	繩文・先住	3 類	(2.0)	-	-	植物茎回転文	ミガキ				1/2
12-1	26	先住	2 類	甕	(8.2)	△ 20.2	-	合彌、列点文(破綻文)	ミガキ	口唇部: 横文		1/2
12-2	26	土師器	4 類	(5.1)	-	-	ハケメ	ミガキ				1/2
12-3	26	先住	2 類	(3.5)	-	-	合彌	ミガキ		11-1と同一個体?		1/2
12-4	26	繩文・先住	3 類	(3.2)	-	-	植物茎回転文	ミガキ、剥離				1/2
12-5	26	繩文・先住	3 類	(2.5)	-	-	「反彌」	ナデ				1/2
12-6	26	繩文・先住	3 類	(2.5)	-	-	渦巻文→綾絞文	ナデ				1/2
12-7	26	製塙	5d 類	(4.6)	-	-	渦巻文	剥離				1/2
12-8	26	製塙	5d 類	(1.8)	-	△ 8.8	ナデ	ミガキ				1/2
12-9	27	製塙	5c 類	(3.8)	-	-	ナデ、灰白色付着物	ナデ				1/2
12-10	26	製塙	5d 類	(3.1)	-	-	ナデ	ミガキ				1/2
12-11	29	先住	2 類	(3.5)	-	-	変形工字文、赤色顔料	ナデ				1/2
12-12	29	製塙	5d 類	(3.6)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
12-13	29	製塙	5d 類	(3.0)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
12-14	31	先住	2 類	蓋	(5.4)	△ 15.0	-	ミガキ	ミガキ			1/3
12-15	31	繩文・先住	3 類	(5.0)	-	-	渦巻文、剥離	ナデ				1/2
12-16	31	繩文・先住	3 類	(3.2)	-	-	渦巻文→ミガキ	ナデ				1/2
12-17	31	製塙	5d 類	(5.5)	-	-	剥離	ナデ				1/2
12-18	31	製塙	5d 類	(6.4)	-	-	ナデ	ナデ、剥離				1/2
12-19	31	製塙	5d 類	(5.7)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-1	31	製塙	5d 類	(6.0)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-2	31	製塙	5d 類	(7.6)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-3	31	製塙	5d 類	(4.6)	-	-	剥離	ナデ				1/2
13-4	31	製塙	5c 類	(1.3)	-	△ 7.6	剥離	ミガキ	底部: 沈代痕			1/2
13-5	32	繩文・先住	3 類	(5.3)	-	-	LR 細文	ナデ、剥離				1/2
13-6	32	製塙	5d 類	(4.1)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-7	32	繩文・先住	3 類	(3.3)	-	-	渦巻文	剥離				1/2
13-8	33	繩文	1 類	鉢	(3.2)	-	RL 細文、平行沈線、刻目	ナデ				1/2
13-9	33	製塙	5c 類	(1.5)	-	△ 4.4	ナデ	ナデ	底部: 木葉痕			1/2
13-10	34	製塙	5d 類	(5.3)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-11	34	製塙	5d 類	(5.7)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-12	38	繩文	1 類	(4.7)	-	-	羽状繩文	ナデ				1/2
13-13	38	製塙	5b 類	(4.6)	-	-	ナデ	ナデ				1/2
13-14	34	製塙	5c 類	(2.5)	-	△ 3.6	ナデ	ヘラナデ	底部: 木葉痕			1/2
13-15	34	製塙	5c 類	(4.8)	-	2.7	ヘラナデ	ヘラナデ				1/2
13-16	38	製塙	5c 類	(3.7)	-	△ 5.6	ケズリ、剥離	ヘラナデ	底部: 布目痕			1/2
13-17	表採	製塙	5d 類	(4.4)	-	-	ナデ、剥離	ナデ				1/2

石製品・骨角製品観察表

探査番号	出土点	層位	種別	分類	素材	最大長	最大幅	最大厚	状況	特徴	縮尺
9-16	A 地点	18	石製品	重飾品?	凝灰岩	3.2	4.8	1.1	部分欠損	素孔 1ヶ所、溝 1条、片面剥離	1/2
9-17	A 地点	19	骨角製品	骨筒	シカ中足骨	20.8	2.7	1.3	完形	シカ中足骨を縦に半段し、内曲を調整	1/2
10-1	A 地点	19	骨角製品	骨筒	シカ中足骨	20.3	3.0	1.5	完形	シカ中足骨を縦に半段し、内曲を調整	1/2
10-2	A 地点	19	骨角製品	骨筒	シカ中足骨	19.3	2.7	1.4	完形	シカ中足骨を縦に半段し、内曲を調整	1/2
10-3	A 地点	19	骨角製品	骨筒	シカ中足骨	18.6	2.8	1.6	完形	シカ中足骨を縦に半段し、内曲を調整	1/2
10-4	A 地点	19	骨角製品	骨筒	シカ中足骨	22.5	3.1	1.3	完形	シカ中足骨を縦に半段し、内曲を調整	1/2
13-18	B 地点	8	骨角製品	鶴	鹿角	13.4	1.5	0.8	完形	開高式剥頭。尾部に切り込みあり	1/2



1 A地点斜面状況(南から)



2 A地点調査風景(南から)



3 A地点東側トレンチ東壁断面(西から)

写真図版 1 清水洞窟貝塚 A 地点 (1)



1 A地点北側トレンチ断面(北から)



2 骨籠出土状況遠景(西から)



3 骨籠出土状況(拡大)

写真図版 2 清水洞窟貝塚 A 地点 (2)



1 B地点斜面状況(南西から)



2 B地点近景(北西から)



3 B地点東壁断面 中央部(北西から)

写真図版 3 清水洞窟貝塚 B 地点(1)



1 B地点東壁断面 北側(西から)

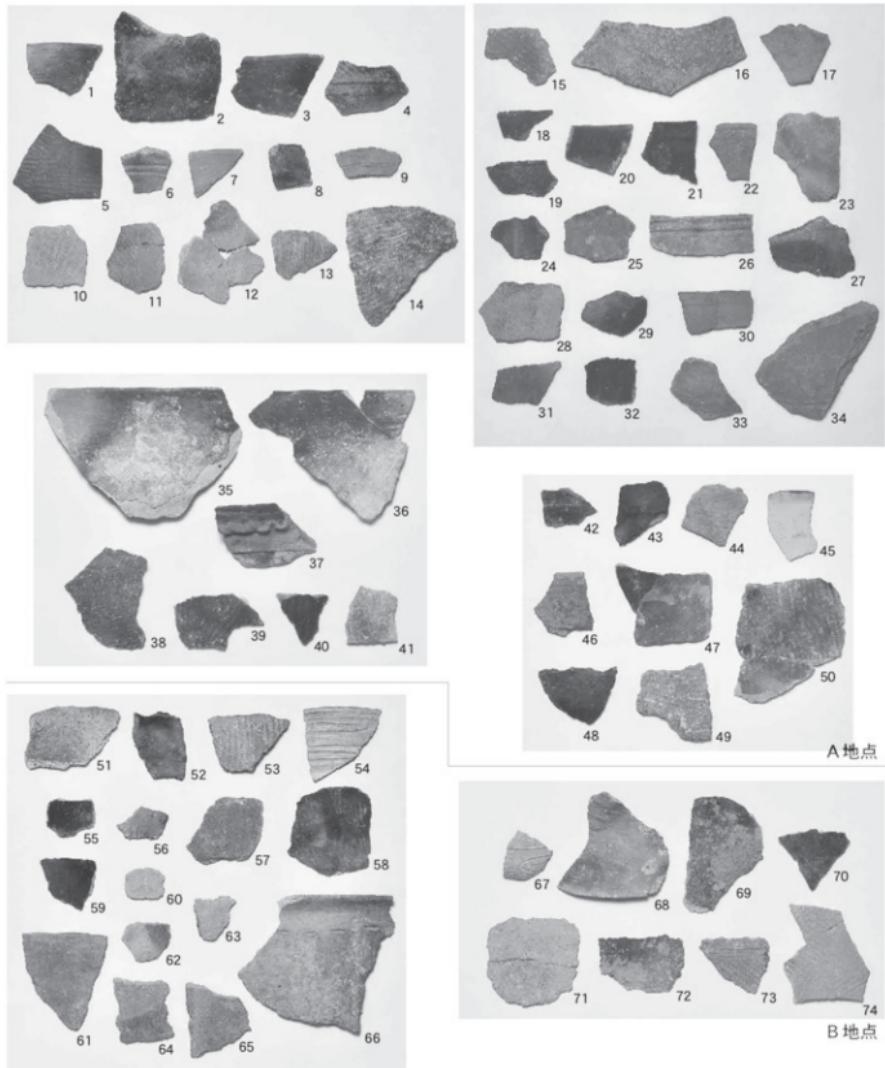


2 B地点東壁断面 南側(北西から)



3 開窓式離頭銛出土状況(西から)

写真図版 4 清水洞窟貝塚 B 地点 (2)



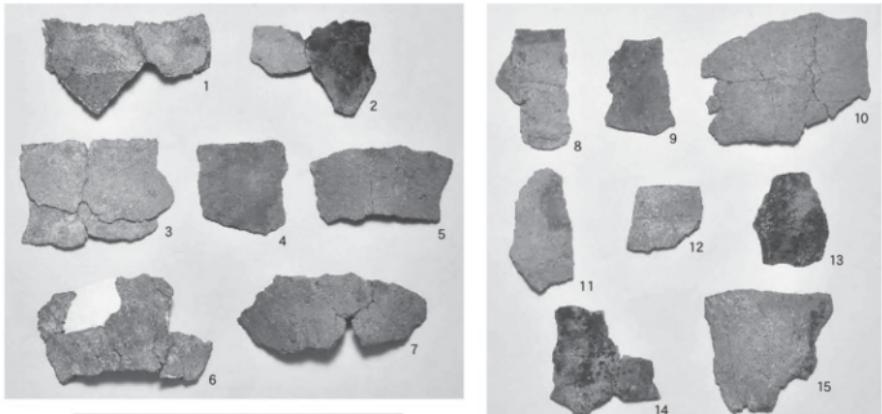
A 地点

B 地点

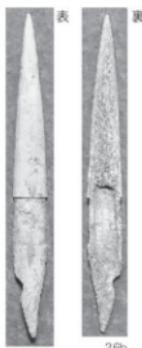
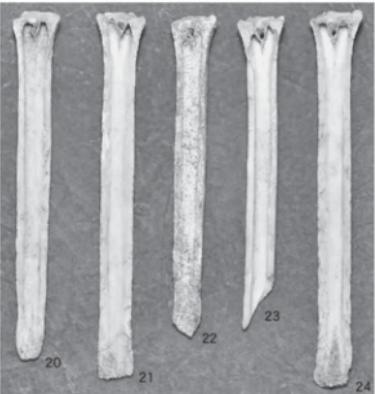
- 1: 第5図1 2: 第5図2 3: 第5図3 4: 第5図6 5: 第5図7 6: 第5図9 7: 第5図10 8: 第5図11 9: 第5図12 10: 第5図13
 11: 第5図14 12: 第5図15 13: 第5図16 14: 第5図20 15: 第6図5 16: 第6図6 17: 第6図7 18: 第6図8 19: 第6図9 20: 第6図10
 21: 第6図11 22: 第6図12 23: 第6図13 24: 第6図14 25: 第6図15 26: 第6図19 27: 第6図20 28: 第6図21 29: 第6図22 30: 第6図23
 31: 第6図24 32: 第7図1 33: 第7図2 34: 第7図3 35: 第7図11a 36: 第7図11b 37: 第7図12 38: 第7図13 39: 第7図14 40: 第7図15
 41: 第7図16 42: 第8図5 43: 第8図6 44: 第8図7 45: 第9図1 46: 第9図2 47: 第9図3 48: 第9図4 49: 第9図7 50: 第9図5
 51: 第11図4 52: 第11図5 53: 第11図6 54: 第11図9 55: 第11図10 56: 第11図11 57: 第11図12 58: 第11図15 59: 第11図16 60: 第11図17
 61: 第12図2 62: 第12図5 63: 第12図6 64: 第12図3 65: 第12図4 66: 第12図1 67: 第12図11 68: 第12図14 69: 第12図15 70: 第12図16
 71: 第13図5 72: 第13図7 73: 第13図8 74: 第13図12

1 ~ 74: 比尺約 1/3

写真図版5 清水洞窟貝塚A地点・B地点出土土器(1)



製塙土器



- 1: 第5図4 2: 第6図2 3: 第6図8 4: 第6図10 5: 第8図11 6: 第8図12 7: 第8図15
 8: 第9図9 9: 第9図8 10: 第9図12 11: 第11図2 12: 第12図9 13: 第12図17 14: 第12図18
 15: 第13図2 16: 第8図19 17: 第13図15 18: 第5図8 19: 第7図4 20: 第9図17 21: 第10図1
 22: 第10図2 23: 第10図3 24: 第10図4 25: 第9図16 26: 第13図18

1~15~20~24: 縦尺約1/3 16~19~26: 縦尺約1/2 25: ほぼ原寸

写真図版6 清水洞窟貝塚A地点・B地点出土土器(2)・石製品・骨角製品

七ヶ浜町文化財調査報告書第9集
清 水 洞 窟 貝 塚

平成22年(2010年)3月31日 印刷・発行

発 行 七ヶ浜町教育委員会
〒985-8577 宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮真字丑谷辻5-1
TEL 022-357-2111(代) FAX 022-357-5744

印 刷 株式会社 鈴木印刷所
〒983-0062 宮城県仙台市青葉区鏡町963-8
TEL 022-295-5966
